

雙魚卷日誌  
大正九年  
一月以降

特別  
14  
1919  
579







176844

大正九年日誌

一月 庚申元旦



晴 属 森 七 酌 々 六 十 一 歳 を 迎 ふ 賀 章 一 堆  
 積 忘 中 二 時 門 を 鎖 し 賀 客 を 漸 次 朝 来  
 現 在 書 日 澄 注 を 礎 方 十 一 時 二 時 已 去 金  
 冬 百 圓 明 日 銀 行 預 入 兄 内 子 交 付  
 才 年 末 家 用 を 吊 し 七 此 の 剩 餘 金 あり 新  
 酒 鐘 田 へ 贈 り 出 せ る 納 豆 白 菜 芋 刺 違  
 又 坂 口 五 十 年 へ 贈 り 兔 肉 の 隙 燭 燭 を 贈 り  
 正 午 自 由 々 々 旅 館 美 乃 子 へ 奉 送 酒 七  
 七 論 夕 刻 去 矣



好ゆ 四府津に 高向 津崎を 訪らんとて 支子  
 を 付りし 丸的 家を出づ 土着 多くと 鴨白 酒  
 を 集り 帯 扱を 遊ん 為 銀 十に 別 入 各  
 開 して あり 用を 弁 する 能 け 小 新 橋 驛  
 あり 丸 的 丸 十 五 分 の 汽 車 に 投 ず 車 中 中  
 橋 文 おこ 居り して 旅 人 乗 客 填 塞 難 道  
 と 扱 へ ば 此 處 を ぬ け 行 三 十 三 十 七 の 多 敷  
 余 等 亦 此 處 を ぬ け 行 十 二 の 丸 的 國 府  
 津 駅 着 高 尾 三 三 三 三 高 向 中 官 邸 也  
 の け 直 二 別 入 ば 家 々 支 出 難 い け け  
 各 の 衆 を 二 三 三 三 例 の こ ころ 香 火 祭 也

東 林 園 記

散 策 し 高 尾 の 風 致 を 終 記 する 此 村 全  
 村 一 村 村 々 の 思 心 の き き を 提 案 して 三 人 二  
 三 高 尾 所 あり 隣 社 を 拜 して 奥 へ 奥  
 田 草 方 彦 京 京 寺 あり 今 寺 あり 夕 刻 茶 室  
 一 杯 を 扱 け ん こと と 請 求 し 主人 丸 的 金 持  
 丸 人 高 尾 娘 團 圓 也 を 併 せ 茶 室 二 室 あり 高 尾 寺  
 へ 高 尾 寺 へ 木 米 丸 一 杯 一 京 都 難 心 心  
 寺 碓 の 高 尾 寺 一 を 扱 け ん 木 米 丸 丸 久 保  
 扱 素 の 遺 物 あり 七 高 尾 寺 扱 け ん 高 尾 寺  
 三 高 尾 寺 高 尾 寺 高 尾 寺 高 尾 寺 高 尾 寺  
 い 高 尾 寺 高 尾 寺 高 尾 寺 高 尾 寺 高 尾 寺  
 扱 け ん 扱 け ん



三日

晴明、今朝、方角夫人とて、前崎、浦爪、為の者  
幅と賜ふ、車馬も、旅、向、荒、織、馬、り、高  
田、の、お、在、建、築、も、親、人、こ、と、を、求、む、之、人、と  
在、あ、あ、ゆ、し、銘、め、の、樹、木、移、植、こ、つ、き、誌  
里、の、祝、を、元、元、す、午、祭、り、は、龍、吟、先、つ、去  
り、余、若、子、一、四、寸、お、を、告、け、て、去、る、四、府  
津、蝦、浦、鋒、齋、を、い、を、家、共、也、こ、難、を  
一、四、寸、若、子、の、汽、車、に、投、し、四、府、津、也、也  
昂、此、刑、こ、し、若、熱、赤、行、威、の、月、に、羅、帷、り、あ  
り、内、あ、久、意、こ、し、目、取、信、三、冊、賜、も、余、が  
江、河、比、紙、を、お、も、し、登、載、也、の、跡、爪、痕

東洋書院

(前崎、あ、あ、ゆ、し、三、十、日、の、浦、爪、元、元、旦、  
こ、し、登、載、を、お、の、二、日、の、江、河、比、紙、刊、  
也)

四日

晴、風、坪、谷、長、四、り、圓、者、飯、塚、屋、の、要、件  
身、東、流、平、山、堂、利、助、経、も、あ、る、石、塚、出  
市、身、助、者、也、の、懇、乞、を、需、む、午、祭、り、を  
具、つ、こ、し、あ、る、方、目、決、注、本、二、冊、寄、り、大  
坂、朝、の、紙、を、メ、の、上、地、理、一、の、計、に、接、す、又、仰  
人、山、堂、里、の、小、田、長、四、り、の、紙、刊、也、和、あ、文  
三、の、女、羊、子、場、也、こ、し、十、寸、泊、初、り、メ、イ、前



田島南河原町を於察

五日

昨日深の膝方より、十時本社始業式を行ひ  
工場二場の洲本演説を為し終つて職員と  
杯を奉けし祝ふ、石塚坂上迄花を伴ひ来  
り昂弁ニ家族にワッピン洋財を行ふ余も  
亦其ころ大坂上野山迄もカウチ中死云  
ふ中電をもち、本林脇美村母の訃を  
し、鴻爪痕著作二冊分北紙紙報、郵  
送す、又新潟より此のころには、石塚坂  
の規則、靴二一編を考し、店井一丸郵

東林原

送、昂江秋の結果友友と記し、其熱中  
に、るる

六日

昨日内海と電流を交り、田村家沼中今迄  
付十日迄日深の膝方より、現在も日深迄  
未三冊方より、田島南河原町を於察  
佛一函枕一冊あり、伊島塚次の子を交り  
昨日高島津一冊あり、昂江秋の熱中  
三十一日、前田代、今迄も、勤慎と  
別し、流より、其ころ、其ころ、其ころ、  
此のころ、其ころ、其ころ、其ころ、其ころ、















十三日

両宮内、内海と電流す、赤船美村加藤  
兼成自、井上日本石油合資株主総会  
の通牒列る、方目隆江を騰字を冊成る、  
平和宣布の大派出づ、午後風と戦つて外  
出、流感豫防のマスクを口をこ、用ひ、四五  
の回方を贈る、之る、物より、鴻爪翁の  
傳の資料を讀む

十四日

風収まり、早起日保の騰字をり、鴻爪  
翁存る三回分をり、関方より

本者直三、冬、直つ此柱治り、真氣  
又高秋をり、森脇並木市野、本  
坊、古地、古、直代十五、田、拂、河内、農  
次、中、ら、し、車、方、在、朝、鮮、雙、四、直、流、り、栗、を  
贈り来ふ、吟の筆、研、こ、親、し、み、祈、こ、度、を  
と、ま、る、

十五日

晴風、朝来日深の騰字をり、青目隆江  
一巻、字、鴻爪、存、る、三、回、分、市、下、し、  
高、く、背、を、た、す、児、為、氣、難、快、午、後、出  
遊、先、子、を、侍、の、を、り、と、澄、ま、の、こ、り



公室の法動言事を見、私に、回り、好喜に  
致して、今日、年、因、是、言、の、義、式、あり、又  
山、收、印、の、令、行、あり、せ、に、是、を、支、行、あり

十六日

明、朝、未、鴻、爪、痕、三、回、分、属、約、二、回、分、長、を  
、發、見、し、日、課、の、騰、方、と、了、了、珠、頂、閣、者  
、名、并、二、回、時、桂、香、と、見、か、代、午、後、七、時、在  
騰、方、と、力、あ、故、上、山、苑、に、ぬ、は、り、日、の、注  
射、を、依、頼、す

十七日

明、午、前、中、騰、方、と、没、以、決、注、才、十、冊、音、了、の  
一、冊、と、刺、す、り、不、能、村、宗、八、車、注、跡、跡、見、る、  
り、和、不、足、者、甚、多、者、二、十、八、集、本、八、冊、欠、る、十  
六、冊、と、跡、山、價、四、十、円、也、汗、谷、美、四、り、り  
来、者、関、方、中、り、と、才、者、前、時、為、の、貴、者、を  
捨、し、時、を、費、す、し、今、夜、梅、月、に、作、し、印、副、今、社  
の、親、友、と、令、し、し、新、年、の、令、を、つ、ま、く、早、福  
田、大、三、の、こ、こ、推、引、及、令、の、報、生、と、欲、す、

十八日

明、朝、未、日、課、の、騰、方、を、決、む、又、鴻、爪  
痕、二、回、分、を、著、し、七、北、城、所、報、す、







内を多く、午後四時の如き頃、此の地を出る  
印符部と種々の協議を遂げ、夕刻より日暮  
を、新年の意をこめて、早稲田の如き特  
部を組織す。下村正太郎より、東京府成  
員を以て死云の電報に利す、その時、  
即ちとす母也

二十一日

下村正太郎より、早稲田を以て、  
員日政を以て、方を以て、  
云々す。時、瓜原、福二面、  
井一未活、関本、  
と傳ふ出て、國考を以て、  
出て、倉井一と、  
由と、  
日中、  
と傳ふ出て、國考を以て、  
出て、倉井一と、  
由と、  
日中、

二十二日

時、瓜原、福二面、  
井一未活、関本、  
と傳ふ出て、國考を以て、  
出て、倉井一と、  
由と、  
日中、  
と傳ふ出て、國考を以て、  
出て、倉井一と、  
由と、  
日中、











田法婚より輕部十回をより十の十より出  
版部よりありありの及老譯教の経管をのりき  
懸激する山の法成り年功、坊より方を  
る、杉よりありきあ代五十四拂よりを  
寺を焼く、今津八一と自画のていこと利  
信く木渡邦とて年者、日本石沙合社を  
配りてをと物ありに、割と各分即所の六十  
株よりありし三ろ三十の四也

二十七

明治朝来市の中孫三印を根改し前崎の  
補傳とて四校葉にせしめ三時百と流る

鴻爪痕六回分比張新報社にせらるる  
す、平山光く、年三あり向者函骨甚代の由  
海す、午後より供あり出あり子とれと本心  
同者も購ひ、琳瑯閣、同者代、四十回拂  
浦者、今つと、流動字とを兄、新より今自  
車より記、和計に判り十字字原に洋名料地也  
具テ、今とと購ひ、杉素に領しててい

二十八

明治左紙後、田村負く、寺現をよりす、其の生  
命、信、陰、今、和、借入、重、四、午、回、の、利、子、を、掛  
る、信、く、木、渡、邦、高、橋、海、より、く、ん、う、き、出











為、物と贈る。土屋五代子、送書と書す。  
横山俊二印、卷六、藤田貞家、子流、吉  
村慎一、註、の、午後、閑と得て、江上外史  
論、金部、等子本、二、号了、奥の、等、を、  
佐、婦、子、の、き、四、の、も、江、の、後、に、列、森、森、  
美、樹、宮、親、子、の、功、を、江、の、後、の、館、席、上  
増田、式、と、流、入、大、隈、家、大、親、親、終、日、泉  
の、と、抄、切、九、す、増、田、の、議、の、こ、と、さ、う、増、田、の  
略、り、流、し、等、由、さ、さ、く、又、改、七、五、年、よ、  
リ、所、の、栗、林、ら、え、の、嗣、子、元、元、花、井、其  
妹、流、感、り、し、去、月、廿、九、日、死、去、未、葬、と、書  
せ、り、と、さ、さ、く、江、の、後、終、る、さ、う、の、字、の、為、

二十三、田、物、抄、又、山、本、書、店、如、及、書  
別、強、親、式、二十、五、田、拂、法、秋、来、雨、の  
リ

二日

兩、朝、車、前、内、局、傳、記、材、料、を、整、理、す、  
作、木、皮、和、海、の、自、志、に、加、筆、し、て、抄、卷  
森、脇、合、抄、二、封、来、流、午、後、動、後、其、田  
完、し、行、き、前、抄、編、寫、田、又、八、本、と、成、り、  
事、終、り、つ、と、行、り、森、合、速、記、を、し、し、  
終、り、し、し、二、的、と、五、的、と、成、り、全、を、行、り、  
の、終、り、と、成、り、し、馬、田、八、本、と、成、り、



リ諸儀ある家迄、聞しりらくの伝出が  
おもしろく感じたり。あるは、附するを  
遠く子山立點指出。唯今の細言を  
多し七的ゆかも、附録初るあるを余の  
遠慮を祝する言明るを餅と認る  
又、於此より餅と認るあり。次上未  
リ昂、注財と施す。十方の古生余  
傳今此抹之儀存るは、起附録  
此の教工とて、起附録  
日出先、ハノ江とて、起附録  
一夜家現し、起附録  
才三出来

三日

唯、其の此の注財を、起附録  
貞吉に、起附録  
又、起附録  
早稲田なる。出、起附録  
贈る。ハ、起附録  
大恩に、起附録  
海、起附録  
の病、起附録



とて其者思つ物を物とせし。真に誠者と見ら  
ず。平三郎と偽るをせしす。

四日

時、丸の内より法印町へ往つた。利りりとも  
十時より十一時の重後分をのめり。俵銀百  
廿元重後分の件を協做す。お出中奥の  
去る挨拶の行ふ事ある。今津八一とて  
寺。河尾後一浴。お出二二のち尻をぬか  
ぬ横山後二部。築地新築に招らる。席上  
節合。因りて往々の往向あり。新築大隈  
信孝の自動車。一回来ぬ宅。真の行儀

とて其者思つ物を物とせし。真に誠者と見ら  
ず。平三郎と偽るをせしす。

五日

西。田打合場を来た。古池着の長江  
の量。二顆お花嫁に入る。お花嫁の  
気味あり。麦酒を飲。後後挨拶  
此歌の飛と云ふ。一と云ふ。又ハ  
田崎杜香。一者と見らる。平沼滋  
とて其者思つ。雨あり出つ。平沼中を  
て前山暢を以。お長條物を贈る。未  
たり。信孝。田中。一と云ふ。切羽  
信孝。とて其者思つ。信孝。とて其者思つ。







四と合ハセテもろくも送す、こゝろを初め  
四十二回と多し、分作八一、一五と投す、  
此尾本底をきり、里ビールを打取寄  
出年毎焼此酒を用ふ、

一日 日曜

明前迄の地材材料油の物を物手圓鏡  
調査に因り、今漸く畢す、内蔵と電鏡と  
文え十日の新屋を納す、田中一頁と  
書西村修養、川上法勵、事坊、正平と  
降雪露、多し、供又女火と銀せ、列り金春  
の流動字も、兄、担、喜、取、降、雪、寸、路、

及ぶ、

十日

夜来雪積り、三寸多、数人を働か、樹上の  
雪を拂ふ、古池黄檗の瓶、梅一箱を携  
え、もろくも、羅振玉、田村、王履、古、正、吉、琴  
操、と、器、房、故、所、し、り、者、帳、を、贈、り、江、河、案  
林、貞、互、々、吊、状、并、香、と、贈、り、関、太  
郎、香、典、入、方、状、と、も、り、出、版、印  
し、し、ま、し、り、多、四、五、階、と、形、も、多、  
鶴、島、中、竹、村、良、貞、才、舟、訪、丹、美、系、幸  
、真、牛、兄、島、状、も、出、す、増、子、在、一、中、年



流午後修理費、之秋急務所修するに於て  
國考館場倉田人田中一貞の由組を以て  
件を以て評議するを以て、故上弘我注射の爲  
すあり

十。

昨、表りて倉田中直少の協出来、其協の  
ため、更々二三の表りてを託す、故本義  
流馬と電流を交り、十一の由組を以て  
此、ゆの七大親此、寄附金一千圓銀  
小田路桂者身あり、午おいを照らす者西  
を同鏡見長めり、ゆ去る、煙子表一印  
昂の病事見、此、物を託す。



十一。

昨、紀元節、朝身市時、孫三印を  
授けし、前時富徳を以て授けし、此を  
以て、倉田一才身流、午給を以て、一才  
のり流、口口五才、又、其、ゆ、自  
車、と、働、り、て、三人、田、乘、樂、地、の、北、中、を  
以て、利、り、給、あり、新、り、て、今、ゆ、も、七、池、本、三  
印、并、其、他、協、の、内、の、内、四、十、四、掛  
滿、今、ゆ、の、一、り、事、也。

十二。

昨、凡、大隈、代、帝、内、の、協、定、寄、附、金、一、千、圓



ぬゆきと、博子とをとりて、唐鬼見の謝  
 状をたかひ、市野を祝き、臨爪前傳とに  
 持て、あせしむ。山内河内、森脇美村、  
 湯、至五十四日、祝入ふ。所修の氣を  
 一、治事と書、一、杯と試む。家元、吉  
 田、福を修む。足立、時打、虎、印、二、  
 長、刀、桂、香、と、紅、を、別、を、  
 香、一、香、と、なる、宗、部、  
 正、方、り、し、し、香、典、返、し、の、お、州、也、  
 又、政、部、り、史、記、四、言、解、未、の、卷、配、本、こ、の、  
 全、部、完、結、午、後、散、集、本、の、の、香、店、の、新、書、  
 を、贈、り、せ、ゆ、  



十三

明、風、連、の、の、烈、風、に、中、城、教、洞、破、壞、し  
 人、を、儼、と、危、り、し、修、祀、す、北、中、の、日、に、際、  
 し、善、仁、寺、に、法、要、を、記、す、親、也、に、並、相、を  
 配、す、大、々、の、井、弁、に、森、脇、美、村、身、法、大、心  
 十、年、の、又、の、神、居、の、針、書、を、長、め、る、に  
 涉、り、揚、派、し、大、要、を、決、定、す、午、後、謝、に  
 乘、し、古、今、文、致、を、讀、む、亦、人、の、需、に、応、し  
 揮、毫、も、す、臨、本、物、を、廣、の、件、を、高、の、  
 降、に、考、状、を、お、こ、す、















の紙をうへて、冊子に書かす。凡ての句  
を言し、半冊成る。而して白紙に批評を  
あかんに、これを金印の八冊に、もとより、後  
田博士未月洋の身まじり、又の御人の  
前金と揃ぬ。するがため、九冊の通久方に、  
五のし、小字あを、つゝ、おの婦、五印あ  
在平、上方見物を終る。御古の金、次、身功  
あり、在平、し、未年、六月、在、一、あ、五十、祭を  
言む、身云々の法あり、ア、イ、又、珠、風、鎮、一、双  
と、終る。おの婦、金、方、止、宿、夕、刻、あり  
雪降る、少のし、と、物

廿一

時、凡、を、終、久、須、美、考、を、中、を、初、め、北  
城、城、通、に、置、き、前、時、お、の、古、一、層、を、同  
め、時、を、移、す、用、海、の、後、山、に、く、千、二、  
リ、た、る、趣、室、鑑、十、九、顆、ハ、印、を、示、す、は、  
去、り、臨、み、右、印、傳、交、け、ゆ、り、小、冊、に、捺  
し、一、印、請、を、必、う、え、ん、を、寸、尺、筆、中、に、  
く、半、後、花、を、久、須、美、考、の、傷、受、ゆ、り、  
く、北、城、城、通、方、お、の、お、の、傷、死、杖  
料、の、油、生、に、没、飲、す、羊、子、未、論







と十餘枚枚書し、十的の印刷會社の  
臨時重復會に送交し、之を神市法界  
市の結果として住宅区域に於ける工場  
の制限を要するの規定あることを探知  
し、今後擴張法廷を要する事業を  
行う強しめ設計局出を要するに、日本の  
重復會に其件を協働し、後面を  
工物を今社所屬地に設け置けること  
を決定す。重復會終り職多に増院  
の指令を交付し、由も後又前時  
の更なるを協し、銀の所中、  
百圓引出天、此百圓降、

二十五。

明、朝、手、前、時、前、時、中、の、法、家、進、修、任、を  
整理し、市、中、を、扱、き、交、付、す、法、中、に、收、入  
へ、キ、寄、入、出、來、米、米、脚、金、等、を、其、後、今  
日、解、決、す、米、米、物、を、解、決、す、和、平、  
七、本、ノ、物、の、午、後、又、前、時、の、法、記、簿、を  
一時、と、移、し、三、時、迄、の、法、庭、に、移、り、午、後  
一時、其、他、の、文、書、等、協、會、の、法、庭  
と、觀、る、入、入、出、代、七、十、圓、復、本、法、科、簿  
院、に、掛、る、

二十六。



明、朝、其、新、治、為、尚、中、一、邊、と、テ、其、の、他、多  
敷、心、配、に、取、つ、つ、し、正、午、に、迄、没、此、其、作  
し、本、護、邦、と、し、其、者、其、と、是、の、事、業、其、年、知、  
午後、散、乘、文、市、を、と、り、し、二、三、の、回、方、を  
獲、て、く、る、本、の、衆、議、院、に、善、通、道、送、る、法  
案、上、程、政、府、堂、に、出、し、て、反、對、其、教、を  
教、を、ま、り、解、教、を、奏、請、し、て、天、皇、御、  
教、と、す、り、以、つ、つ、の、又、刊、ハ、大、改、に、於、け、る、大  
丸、其、改、正、の、案、を、領、全、權、を、傳、ふ

二十七。

尚、大、浪、侯、と、稱、を、之、の、協、會、の、事、務、と

云、り、す、前、述、の、男、の、侍、に、挿、入、に、之、を、  
と、教、心、配、し、て、行、村、と、交、行、す、男、の、侍  
記、を、其、月、十、者、と、解、結、す、り、と、助、を  
と、愛、つ、つ、す、り、有、房、井、と、協、會、し、山、田  
教、成、を、其、ま、り、臣、次、と、す、り、と、決、し、四、人、  
者、状、を、其、年、の、午、後、乘、賜、す、り、と、閑  
を、ゆ、て、雜、報、を、作、す、り、文、的、協、會、臨、時  
刊、の、者、世、界、政、治、の、目、的、と、方、法、と、未、來、と、  
其、以、り、其、終、に、五、二、の、月、に、此、に、日、留、文、二、  
と、報、其、す、海、邊、と、す、り、星、姫、出、婚、祝、の  
中、其、余、出、る、分、五、十、四、交、行、す、



















荒大隈言者と讀む、橋本左武印の訃に  
あり、御圓出身の醫家なり。歎余う家  
に大志者ありと云々。わらう此醫者と云ふ  
を例とせり。余の亦此醫者なり。余の亦  
らんことを致せしむるんを因え。余ま  
り年病くして早く逝り

七

日曜

吹凍風凜烈、朝暮山嵐と先、編輯  
往予十一時とて廿九と併よえぬ出銀  
産移並に假し、皇春仍の法勅を  
觀と刻悔也。山田と久松産の法難  
刻見ぬ。きく、ちん山嵐の治

八

町行村自銘の録に予入をりり持卷  
市印とて補傳筆に記す末、予を來  
る十時とて大隈郡に持る。新徳大  
親四月朔とて増田義一引えり  
付、後未終條に關係ある中の一回根  
うん午終の如きを云々、橋本左武  
印葬式、香典ありお代人をきく、午  
後終條に没記す











京都より東京へ、大丸(大坂に控ける)火災  
後、千代田の株式會社を目論み略  
り、満株に上つた由を報り、又心大  
胆、商標の事を報しある。

十三

明治の辰辰の行を報し、三木武吉は  
送る、つと東儀鐵道、関西地方、  
行方、午後山田、教誠去り、謝儀  
として、荒干、午後、午後、  
数来、二三の昔、店を、  
あつた。

十四

日曜

雨、多量に降つた、  
此言の、の全部、印刷、  
程、お、高、の、  
今、  
高、  
今、  
と、  
あ、  
贈、

十五



西、鶴爪居の巻紙言を著し、正午にあり  
成る。此等事賜す。張、今津川一に属し、  
河津金聖の評、決る。京那の下打三太  
郎、兄高、就とめ、たす。又、(さす)ハ  
一、方を是がす。以上、所、  
為来、診、今夜二時、  
樂、俱、  
余も、  
出版部、  
巻を、  
を、

十六日

所、  
巻、  
を、  
田、  
即、  
を、  
り、  
三、  
也、











明日曜(帝自)子伴(山)に到(来)後、  
海(瓜)者(拔)心(の)件(者)市(中)の(事)あり、故(に)  
五(半)身(取)言(者)の(歌)を(あ)す、故(に)  
今(の)在(人)を(を)ら(し)桐(苗)五(十)本(植)也、  
午(後)廿(四)時(ら)り(り)其(後)形(乃)山(田)教(授)也  
也(者)。

陰(多)乳(丸)的(海)河(海)士(都)合(洋)行(の)途(に)上  
の(中)央(停)在(坊)ま(じ)え(送)る、左(奉)天(命)ん(多)  
内(を)も(出)又(の)電(報)到(る)之(を)も(し)之(候)神

と云(々)る、程(打)字(の)海(瓜)者(校)心(の)件(者)！  
甘(東)流(者)の(心)に(托)し(て)三(四)の(女)の  
出来(言)道(集)を(お)す、山(田)の(心)必(可)法  
印(刷)下(る)と(海)瓜(者)：(出)席(の)印(傍)試(刷)  
を(回)計(一)説(して)く(す)、大(段)を(道)集(を)  
小(こ)し(し)海(瓜)の(心)を(お)す、(道)集(を)道(集)に  
和(流)に(志)す、是(を)も(り)し(と)も(之)ん(を)示(す)也  
帝(を)姑(息)の(神)傍(試)刷(の)原(と)の(心)を(示)す、  
也(者)。

雨(下)打(心)ち(ら)り(り)考(就)を(り)る(す)、東(陽)東(流)



外村より安達宛書通社務より来候散  
果下谷の古紙と云ふ之圓書を贈心終  
不慈樂軒に領してうへり。三村より  
依頼に厚く云々之代筆手山巻を  
不お右に在候後回へて照合致し  
方、山田致候とて身考、早大維おる合  
の報列の

二十四

相向渡り、冊共奈平とて冊後直平去  
十方死云々印をせを交付梅枕秀典に  
をりかゝ、左邊抄印の多内にて云也  
と此つれ、又山田殿城に奉り、中島半次  
郎校用にて来り、言道お紙集をぬし  
四巻目寸珍本二冊成り、午後散策社四  
送、此物を贈ふて云々。

二十五

丙、安斎冊共、書札をぬり、又多分御同  
後、おくうのさの印初号社務を  
市山宛書札をぬりし月未抄を拂ひ  
件、を云う、おのり桂書とて来り、此の  
早編白の紙集、市山宛の紙(八幡下)、  
より其の海巻を觀、中島殿長紙に











大曲の古巻をとりて西澤の先教録を  
解し、午後先子と付して紙に、おと  
ひ皇春の巻に流布字と見え、松春  
の巻に習ふるや、物中七、不中、廣井、山田  
心算功

二十九日

小雨、朝母書とあり、町の印刷株を  
込耶の巻とあり、皇春の巻に納入し、  
余お株を三株に納る、株込也、妻の巻に  
十株に納る、分りの株込也、皇春の巻に  
大分の大分郡家政科、卒業其の流布を交  
く、関方より来り、同書紙の巻をとり、未

五月末の流布、(百分の六分)日能の通牒  
と多く、東邦の二代株の三浦(死玉の  
報利、)山林の三浦、三浦の別子  
府、古三浦、桂力、中城の巻に、  
古状を納る、

三十日

雨、妻の巻に十株株込、二る十日也、  
印刷の巻に、文付、来月、皇春、永楽  
の巻に、松春、早稲、中城、の巻に、  
松春、永楽、平、の巻に、皇春、松春  
の巻に、松春、永楽、平、の巻に、  
皇春、松春、永楽、平、の巻に、











御幸御く行く内なる方州をたがす  
田代英一とて来者、羊子来泊

吾

雨、文の場合の山形有る、垣輪園集二  
冊抄帯一、えんとう帯を坊抄編纂  
：傍り文の青虎も出物をもつ也、山  
田信成来泊、母又冬、甲申遊、是  
：郵にすまふ、古池とて夏、長雲松の幅系  
：西崎ち海の印譜と解の、横濱三河を  
：この印刷の職、遠足舎を絶さんとし  
る、中太希、免、書、就と認の、社、免と横濱

三洲、杉、中、打、お、い、死、去、り、竹、状、を  
お、り、す、和、あ、さ、ま、き、出、る、年、泊、志、論、を、後、又、且  
お、す、

いり

雨、後、晴、前、吟、海、男、来、泊、下、林、と、飲、二  
房、状、の、い、り、可、也、と、報、し、来、り、森、脇、美、水  
村、来、り、え、の、城、守、の、い、り、お、す、り、す、者、を  
お、し、と、山、午、い、り、る、午、後、健、に、出、浴、神、内  
お、す、り、お、を、焼、心、杉、喜、に、飲、し、と、い、り、す  
と、熱、海、城、内、の、い、り、和、の、有、り、屋、隣、代、と  
い、り、り、お、を、記、し、る、杉、文、香、に、十、五、回、お



方

連雨漸くおぼる。十のらと後念の存に到り者  
畫と捺し若干の如く。市中野津三印本  
湯、在座(海城内)也。是二者を授り、時因  
次印本系伊三印本流。琳瑯又も。既飲  
業ありと傳ふ。村井朝行に戸川支店、  
此の仲も。此居方とあり。

八

四時、地下鐵道五十株地本三印本  
と流り受け比々。方電流もを交海其  
手流をわ、行村市望城江源表本流

印本時代の本あり。本流、目打改る。本流  
篇、今と上代を。文竹、二點、色付す  
流の侍士のトライヤケ下巻。出来能くも  
音よく、午時、二の早稲田大。その流持る。今  
に臨む、後流、後初め。その出、所也。江都  
浪夫、其流、田中、一印、投、商、約、手  
の裏方ととも。

九

四時、もろもろあり、主、印、に、類、入、し、五、五、の  
寺、印、流、に、お、二、五、十、田、引、出、し、表、る、五  
十、田、交、り、定、印、に、類、介、入、し、(五、五、自)、地



下敷色様也十、此より御殿を建てるに  
目也、改本三印、お湯より、西村真次森  
陽美花才来功、毒腸より錦帯橋下の  
香染の煙草を好む、人を傳へて庭前  
の籠名をそまひ、午後南葵文庫に  
も、その園者御座の信し、石上玄嗣  
(芸亭)の建設(の)千る四十年記念  
典を行ふ、大隈侯常、古紙をみる

十

所、平杉庭那一、お湯を贈り、古池  
十、その用古画若干、お湯を贈り、古池

い、お湯を贈り、お湯を贈り、お湯を贈り、  
後、散葉を香りの古紙に、園者を贈り、  
五、お湯を贈り、お湯を贈り、お湯を贈り、  
今、お湯を贈り、お湯を贈り、お湯を贈り、  
このお湯を贈り、お湯を贈り、お湯を贈り、  
工場、お湯を贈り、お湯を贈り、お湯を贈り、  
お湯を贈り、お湯を贈り、お湯を贈り、  
お湯を贈り、お湯を贈り、お湯を贈り、

十一

日曜

晴、坂の上、お湯を贈り、お湯を贈り、お湯を贈り、  
天、お湯を贈り、お湯を贈り、お湯を贈り、  
お湯を贈り、お湯を贈り、お湯を贈り、  
お湯を贈り、お湯を贈り、お湯を贈り、



ふに竹余りとも種を指す才する不あり、及物  
白葉並つ子を嫁さる。午後元るを付ふ  
て外出大世衣色に、葉散を種を嫁  
る家へへる送せしむ、東を、る  
扱をを親、人生の多きを花の散よ  
りも多くと強んじ山を利り得ず、云つ  
て、ゆい、指さる、通けり、市中云、我  
る、る、皆親、梅の生ん外、出、り、と  
免し、丸、百、長、に、立、寄、り、寸、珍、洋、本、二  
部と嫁ひ、終に、新、産、を、終、に、三、四、の、妻  
産、為、産、者、利、も、利、り、也、也、親、親、を  
指、出、し、新、産、に、房、一、松、木、を、路、を

い、る、る、不、在、市、川、平、信、彦、那、一、印、密、元、は、七、日  
助、如、く、其、母、を、治、物、を、嫁、さ、る、大、根、代  
帯、し、る、と、言、ひ、を、多、く、久、寄、集、を、田、部  
の、由、人、一、部、元、也、

十二日

時、葉、崎、の、寺、元、を、巻、る、打、井、河、の、こ、こ、二、言  
目、六、十、の、時、分、を、修、入、也、也、の、如、く、印、し、る、連  
丸、三、光、七、付、ひ、言、を、あ、り、る、終、見、り、利、り、流  
持、寺、を、修、る、本、物、の、後、終、を、多、く  
十、二、の、を、る、も、き、る、也、也、其、殿、を、く、い、ひ、ゆ  
余、に、新、き、三、の、中央、傳、在、付、者、其  
台、中、に、級、し、て、い、る、定、者、ん、を、早







送主物よりしるを新す、依りて田付也  
是を切ひ十二の三人日付南横河の事度  
酒飯と進すし、丸巻と立書、二三の圖  
書を贈るを物書、印刷局社を遊覧  
刷上り全紙を為指す紙す一揆の上  
へす、迄百敷ハる、無んとも、自叙伝を  
五三の紙にすし、ポイント紙也、今知  
初めさき、切知す、山も若底を格古  
論を解す

十一万

明治九年より多岐海原を移すに於て又  
の考沈も後なるもさき半、幼決果  
を決す、利益総額七人、一、二年  
一時教令、廿五、早大、早大、早大  
開院式あり、状す、又同日総長  
手紙、今の報告と多々、前、後、  
所為、遠夜(廿五)、新、新、新、  
以上三件、出、海、の、差、を、  
既、既、方、と、後、を、西、丹、  
ふ、を、得、る、田、原、武、夫、  
也

十七万

明治九年、外、出、え、子、を、  
南、の、



二枚ける古地圖の古書屋宛宛  
陰又荒平の園方を得中  
城身重縮帳帳十二冊あり  
り光子のあめ物を購ひ  
：飾して置く、午後  
す。

十六

晴時、幸り印  
を催す、横濱、  
遊心、海あり  
一覽し、茶室の

時一回本敷の  
張り、夜々入  
武夫の義式あり  
香典十圓をす。

十九

晴、市村美鶴  
功、三打も  
贈り、午後  
ぶつう鏡の  
知らぬし物  
次、古池



町、原、高、中、左、右、三、派、園、也、境、跡、約、一、つ  
き、御、寺、と、も、ぬ、り、藝、文、書、物、者、才、二、功、一  
込、り、を、因、奇、観、場、合、に、合、成、八、一、者  
状、も、り、か、す、又、坂、上、所、有、の、才、を、採、取、跡、地  
書、地、而、こ、ん、じ、定、地、と、さ、う、さ、う、物、中  
物、産、書、一、り、吾、輩、の、遊、戯、物、に、垂、葉、し  
あり、迷、惑、を、免、え、る、家、漸、く、抄、録、目  
の、十、分、出、来、り、り、概、算、に、處、を、成、り、し、且、際  
り、る、ん、ど、其、地、と、さ、う、さ、う、も、可、也、午、後  
出、遊、丈、路、の、春、山、木、二、本、買、入、一、材、細、く  
一、材、昂、也、概、算、に、出、高、中、の、望、に、さ、う、約、よ

リ、来、者、。

町、原、高、中、左、右、三、派、園、也、境、跡、約、一、つ  
き、御、寺、と、も、ぬ、り、藝、文、書、物、者、才、二、功、一  
込、り、を、因、奇、観、場、合、に、合、成、八、一、者  
状、も、り、か、す、又、坂、上、所、有、の、才、を、採、取、跡、地  
書、地、而、こ、ん、じ、定、地、と、さ、う、さ、う、物、中  
物、産、書、一、り、吾、輩、の、遊、戯、物、に、垂、葉、し  
あり、迷、惑、を、免、え、る、家、漸、く、抄、録、目  
の、十、分、出、来、り、り、概、算、に、處、を、成、り、し、且、際  
り、る、ん、ど、其、地、と、さ、う、さ、う、も、可、也、午、後  
出、遊、丈、路、の、春、山、木、二、本、買、入、一、材、細、く  
一、材、昂、也、概、算、に、出、高、中、の、望、に、さ、う、約、よ

科、禮、三、の、外、回、祝、祭、法、事、夕、刻、  
敷、局



崎坂上は花もより余らぬと海射を施し  
てある。少少海鳥も飛来し三つある。出所部  
も世界改良道普のち三尾能本を愛  
く、ま耶下村界し仰みし能く書状  
をもたし正大方の病状につき云々  
のりとしし。午後、午後、午後、午後、  
三お底を記のてう。雷あり、江都  
海へ下りてある。其の件。其の件。其の件。  
し、晩食を造りしてあり。其の件。其の件。  
し、其の件。其の件。其の件。其の件。  
且、其の件。其の件。其の件。其の件。

崎、西化屋を祀き夏外套をニニング。千三  
ツキと注又す。今、其の件。其の件。其の件。  
其の件。其の件。其の件。其の件。其の件。  
を功、二三の回者をいへ。其の件。其の件。  
論を誤且抄す。其の件。其の件。其の件。

崎、前時男おり。其の件。其の件。其の件。  
其の件。其の件。其の件。其の件。其の件。  
其の件。其の件。其の件。其の件。其の件。  
其の件。其の件。其の件。其の件。其の件。  
其の件。其の件。其の件。其の件。其の件。



















夫、河内廣次印らしし年者、高橋源一印  
下者、枕をりかき、赤陽田制す、湯、文の極  
又、報論等々の件、と協議あり、電話機十  
田納了、午後おき、信教集を以、珠浪君  
を以、一二の者と、始りて、初、雨飛、然  
日、不、言、ん、ず、

四〇

雨、寺、宮、前、の、お、報、時、を、始、り、中、の、時、欽  
況、者、を、郵、送、す、古、池、一、二、の、物、を、高  
ら、し、来、り、示、す、午、後、雨、を、冒、し、神、田  
迄、三、教、集、二、三、の、方、店、を、示、す、之、の、

洗、心、の、と、常、用、墨、の、一、ル、ハ、瓶、十、二、列、也、四、田  
林、

吾

雨、相、未、揮、毫、も、正、午、迄、二、十、数、紙、を、揮、了  
況、し、午、後、又、五、六、紙、を、揮、了、善、終、り、北  
老、の、墓、誌、を、著、す、上、寺、各、方、面、の、  
囑、を、三、つ、け、ら、る、もの、こ、の、り、と、皆、成、る、成、り  
後、一、羽、杜、方、を、ま、の、り、田、お、合、務、を、自、来  
の、坂、上、身、の、浮、射、を、施、し、と、去、り、終、り、家、境

二〇



向をり：号摺内し十時迄の付ありて  
お出玉の者：紙と婚ひ一二又ありて  
旋り月半帳と婚ひ紙座：列う二三の  
物と婚ひ紙座に入り半座し海軍の  
ハリリ流動等と見落さる切電、早  
福田大島らし大正九年が決算者  
利也

七

雨ふりつゝ、北を巻待本船刻の  
西条舟長、北を巻、左米四山崎垣  
とウアンリッゴロ、お米由待を  
船り

る。田村島の独者五枚を其の、本船  
可め、十時と印刷舎祝の午後合  
に、本船(六月)配南平(二刻二分)  
お米(二分)を決す、増子其の、堤  
作の、お米(二分)の仲らる云々、増田  
洋の、お米(二分)の仲らる云々、増田  
と、お米(二分)の仲らる云々、増田  
の、お米(二分)の仲らる云々、増田  
の、お米(二分)の仲らる云々、増田

八

拂儀果あり、刺墨を惜る朝来巻  
子、押さも十時迄、一書成る、山田







ほみちを新法と利用し、ロウを撒布  
するに先、葉数枚のぬし、投棄せし  
十一箇箇也。ゆゑに各部制より、こゝろを  
前記に属せしむ。自分の所人、飲んば料也  
見し、あつて、押さむと、ぬし、三箇の  
鏡子、並に、三文字、成り、郵出と、此に、松の、手  
五時、固者、飯、場、居、の、麻、布、の、事、務、不、と、垂、負  
合、と、の、ぬ、し、き、**館、員、昇、格、の、件、を、協、成、す**

十一〇

湖、く、快、時、行、村、十、林、(望、三)を、扱、き、温、韓、の、  
打、合、と、わ、く、入、心、の、多、内、マ、も、こ、と、物、こ、う、す、の、

ゆゑに、新法と、興、つ、の、山、田、内、心、並、木、の、元、手、外、法、  
扱、上、の、花、を、身、子、注、射、を、ま、く、**森、脇、四**  
**代、英、一、十、五、法、植、木、を、手、り、松、の、手、入、と**  
**如、お、平、法、外、回、に、教、兼、回、書、を、精、成、**  
**中、の、欽、沈、も、も、佛、子、の、葉、子、列、す、**  
**而、本、流、平、も、も、末、年、信、沈、文、と、と、報、報、し、未**  
**の**

十二〇

陰、増、内、道、是、中、の、欽、沈、も、有、状、を、見、る、ま、  
ゆゑに、**一、冊、取、は、直、つ、松、柱、の、り、く、贈、る、**  
**并、二、方、状、を、の、り、ま、里、を、く、梅、状、の、り、す、**



















城如の事... 田中... 其地と協成  
し飛石の協成と云うは深更ゆも休  
や死云ふ事典と云う遺族... 本雪

十六

晴明、今田の満韓流の事早稲田大  
之の事し三三日出版部と云う内流  
貴として生々々紅領あり。京都流  
人番、方物と云う、森陽東流分務  
を云う、校及天春某の属、應し馬  
廻り手、間の生首、出し又其一匣に  
四角、その物、礼状と云う、和田、苗左  
三流程、二行、一寺と云う、銀を松村よ

川眼鏡を贈山(の)信共四田也、新行、  
預け、生々三三日出し、内子流  
る田村、方物、生々の内、拂、池田龍  
一、寺、物と云う、村井、銀の、く、借入  
生三三田也、本年月上旬、期、信、片、文、の  
堀、余、に、支、出、す、べき、流、費、二、三、田  
を、以、つ、七、支、拂、の、件、森、脚、に、托、す、在、五  
海、呼、由、是、是、古、物、と、云、う、觀、劇、の、謝、禮  
を、し、更、に、午、後、又、向、到、る、は、吹、口、以、由  
文、有、り、母、重、善、壽、の、事、あ、ら、ね、ん  
築、地、物、事、お、り、到、る、店、上、一、場、の、流、後、と  
云、す、其、時、在、中、加、賀、早、三、三、と、云、す、者











とよ、初め旅を足る所の不動の園を心  
の夕刻大丸の辻を歩み、十時頃正太郎  
妻の病歿ありし、枕洗を細説すは、ある  
後行者を調心、自動車ありしを、  
下し、関行の汽車に投す、千の、時三十  
分也、金山と聯絡船賃を二十圓二十圓  
也、直に寝室に入り、睡眠を貪る

二十三日

汽車中

時、尾を道より、物取、七時四十五分、  
島に着、東儀鐵道の此地、壽産、田草  
開演中、のりを、紙を、取り、車中

給をも、を投す、由宇(山に)大畑の(子)  
海中、の、時、を、即、み、風、景、自、也、十、時、也、  
く、柳、井、津、を、こ、く、去、年、一、時、谷、外、二、三、圓、者、  
船、回、人、と、態、を、此、と、途、次、錦、帯、橋、を、  
見、し、此、地、二、湖、し、る、こ、と、を、想、ひ、記、す、及、  
下、松、と、ま、の、ち、を、う、る、も、不、謂、く、瀬、戸、内、の、風、  
景、殊、る、す、し、十一、時、十、分、徳、山、を、こ、く、こ、  
こ、入、海、軍、煉、炭、所、あり、三、四、度、を、こ、く、こ、  
七、時、頃、二、時、三、十、分、下、の、関、着、山、陽、ホ、テ、ル、  
に、行、者、を、托、し、車、を、俄、の、て、市、中、を、過、  
り、見、し、先、の、煙、之、浦、を、訪、の、を、源、平、の、歌、讀、  
と、見、赤、岡、の、宮、を、拜、し、又、安、徳、帝、を、御、



後を拜す、(北色の所名と河内院寺と云ふ)  
赤白宮の境内に平氏一族の墓あり、壇に浦  
戦歿将士の墓也、伊弉陸奥か本島崎亭と  
折衝する其根柢の一室をみる、仰き、李  
の所名に記し、引接寺を一覽し、終に李  
遊羅の地盤と見え、此地近ハ引接寺、入  
市道の交叉點と見え、今ハ文書所あり、道路  
甚ハ狭隘なる、遊羅あり、の難道と云ふ、  
赤白宮より例の長門を平家托語を花  
す、又登る、娼妓の参加して行列を為す、  
習あり、後院と云ふ、買集め、山陽未だ休息  
中、認め、車あり、遊羅と云ふ、今井貴一永田好三

二十四日

釜山着

明五時起き来り甲板上喫烟室にピア  
ノを美す、そのあり、やま、さう、  
賞六船中の一快也、甲板道途中坪谷  
長中、海色徳あり、人あり、西人云々  
昨夜月下に、関に、建着の、船を



得る能く、一行二十数人、皆一不室に、難居一  
夜をぬく、しつうと云ふ、誘ひて其室に、むり  
況きえぬ、喜田博士もありて、寝台をき、  
難と押し、如く、腕股相摩、して、困臥  
し、居ると見え、中、に、出後、出身者七、名  
あり、又此船中、に、満、鞆、視察、の新、支、記、者  
固十数名ある、こと、も、知、り、六、時、過、り、  
船、体、漸、や、く、動、揺、す、八、時、過、り、釜、山、に、着、り、  
校友、安、武、代、志、大、曲、美、太、郎、山、本、頼、し、助  
田、崎、貞、雄、梅、田、谷、三、郎、等、埠、頭、に、迎、ひ、  
直、に、ホ、テ、ル、に、投、ぎ、余、と、ほ、谷、田、を、知、り、と  
泊、る、回、室、也、他、を、皆、ホ、テ、ル、以、外、の、所、合

就、く、校友、追、く、ホ、テ、ル、に、話、し、来、る、余、の、名、  
れ、き、個、の、所、来、手、元、に、達、せ、り、釜、山、埠、頭  
に、在、り、他、の、名、れ、も、税、関、の、検、閲、を、う、り、  
り、も、余、の、名、れ、一、個、と、知、り、る、お、一、個、京  
都、も、し、チ、ツ、キ、に、預、け、ら、る、の、未、着、り、て、衣  
類、を、改、正、し、能、り、す、り、不、便、を、感、ず、る、甚、し、幸、  
校友、大、曲、税、関、に、存、職、す、る、に、お、投、ぎ、余、と、依  
頼、し、且、つ、検、閲、の、為、疑、と、交、付、す、り、十、時、二  
三、の、校友、の、案、内、り、て、出、ぬ、龍、崎、山、に、登、臨、  
府、立、回、考、館、に、立、寄、り、り、自、動、車、を、働、か  
し、東、萊、湯、あり、臥、く、此、の、間、三、十、分、過、り、  
る、所、に、朝、鮮、部、隊、を、多、く、見、解、人、家



その挨拶を見、初めは朝鮮に入りたる恩を  
あり、金山市中、日本化して朝鮮、氣分  
絶へてあるあり、此温ある金山附近唯一の  
娯樂場と云ふ、葦葦菜館に入り、一浴を試  
み杯を奉ぐ、同行余の、和国酒谷や東  
東道、校友楠田山本也、館主の需に應じ  
有、西膳と惣をも、四時一回自動車にて  
帰路、就く、ホテルに帰る、幸く、  
物別を、し、あり、初め、安心す、大曲、  
本、公、お、大提、碑、本、を、示、る、倭軍  
大敗の記念碑也、(文禄後)今夜余等宿留  
のホテル、校友会を開き、十数名の校友

二十五日

金山共

余、余、今、し、所、谷、中、お、其、居、の、と、列、(、食、後、  
余、一、坊、の、演、説、を、お、す、且、つ、東、京、と、し、携、  
帯、せ、る、出、版、部、津、義、録、宣、傳、の、事、簡、  
を、証、令、此、の、上、有、り、者、(、無、事、也、)、ち、ん、こ、と、を、  
校友、に、托、す、此、の、者、簡、を、余、の、名、義、に、  
面、話、に、代、り、印、刷、し、し、る、も、の、也、十、一、時、校、友、皆、  
散、す、余、等、又、寝、に、就、く、

明、今、朝、会、中、和、西、酒、を、好、谷、と、名、り、す、と、此、は、  
後、出、身、の、因、を、お、す、ホテル、舞、台、用、一、百、十、五、  
分、に、名、を、お、す、と、要、す、其、代、不、可、の、其、品、使、を、







也二時三十分金水を行き秋風山嶺を上り下  
るハ一驛あり其間と云ふ湯甚しく念  
をこし其湯水と仰け湯を懸るハ沃川  
錦江大田の法驛と云ふ大田より分岐路  
あり木浦と云ふ五時鳥島致院を行き成  
款を思く杉崎大尉新死の碑と望む龍  
山を好むハ時京城に入り加賀直次校友校  
橋菊雄停車場に余を乗せ和国坂谷と共  
し朝鮮ホテルに投す今夜加賀直次と云ふ  
和国坂谷を伴ひて朝の所京長久に到り  
日本料理の豊と云ふ投す四五寸に在  
路と云ふ十二時ホテルに到り臥す

二十一日

京城

時六時半起床、客未未より後をのき教  
授東より上郵、又杉井民次郎の平壤に在  
るを懐念し一書を言ひ、後特目府回者  
主任小田幹次郎とある、後特目府回者  
移す、偶々日清生命令の吉田淳次郎小  
泉某訪ひ来ふ、その案内より遊覧し  
ホテルを出て自動車一を駆り先づ後  
特目府に到り、和国坂谷と云ふ、一行先  
して路、後特目府と云ふ、余等(和国坂谷)列  
を脱し、南山の倭城甚く遊覧、京



概全市の形勢を足る、是を以て余一人吉田を東  
道として奨忠壇に到る、これを朝鮮某時代の松  
魂社也、御葦、奨忠褒烈の款を掲げたる祠を  
あり、堂宇、観音、是くよりと告る、此は閑雅の  
地、楊柳風流あり、そのもと先遊門に至り  
城壁を登り、眺眺し、東大門に到り、更らば鐘  
路に出、此の一市街、純然と朝鮮人の高踏の  
あり所、朝鮮、氣分大い漲る、白衣無紋  
の人市中、横行す、十数軒と行き、一公園に  
入る、バガタ公園と云ふ、園内、樹木、立、榭あり  
朝鮮人多く集り、遊樂す、こゝは、一其基の古  
塔あり、其形式、其彫刻、大いに觀るべし、或

此の頃、建主のものと云ふ、別と豊碑、一其基あり  
り古塔とせ、大理石を以て作り、蓮体の  
上を坐す、大田覺寺云々の面字、曆、後、正  
一、善、此地、大田覺寺の舊址と云ふこと  
疑ふの餘地あり、案内者の言、ま、か、け、は  
敬天寺、元代此の同型の古塔ありと、公園  
の塔、之れを摸して、そのか、敬天寺の古塔  
より、田中、吉、山、伯、自家の庭内、持、ち、来、り  
物、藏、と、云、き、な、る、もの、即、是、也、公園を出て  
て、普信閣の大鐘を見、此の鐘、鐘、路  
の一角あり、鐘、路、の名の記、る、所、以、也、此、鐘  
五、石、に、二、年、に、鑄、る、所、也、太子王家の美術



品敗者所に列るを一説し華教教次瓦  
印二款を賄の時改に正午をさく、余支四  
朝鮮料理を喫くことも需む付父  
と明月館に入る(本座を焼くころの支店  
と云ふ)此の割烹店をもと皇の居の二部  
ありて當りしとき李完用居りし所、顔度  
美觀を缺くと當り奥の一室多紗田面  
目を存す、こゝより上壇に更紗の席を  
設け左右に銀子の方枕と眩掛、背後に  
同じ綴子の背を倚する具あり、又左右に  
造席を設け侍者の坐す所とす、即ち  
朝鮮貴族家長の一冊班取ふべし、余上

朝鮮料理

席に坐し東道の有人兩側に坐す、其内酒  
食を運ひまう時、早上と召く料理品を  
大略左の如し

- 花菜 藥食 正菜 菓果 餅

- 神仙煙 片肉 蕎麥 魚菜 煎餅

朝鮮料理より日本支那折衷とも云ふべし  
淡泊なる所寧ろ日本に似し種々食ひ

喰ふ、午後ハ一新と合し昌徳宮を元の

禁苑内流石に樹木多く心氣爽快と完

ふ、李王家の傍に佛像十數基を

あり、中々新羅時代大藏像大日如来

あり尤も見るべし、他に雜器を多く







秩助を満、今板大連と寝るを得た。余は二三名をこきり、右後佐代五田井満城社より車中へ入る。朝解る頃西安路の二三の巻より出を配布す。午時合巻を出別れ、自の事を記せり。半帳をこきり、披ふありと漸やく得たり。鴨緑江をこきり、前夜京或久に校者らと教つり。我がしを唄ふ女のあり十一時新義州に達す。俵車時間五十分あり。税関更へり来る。為札の検査を為す。此より一時器を改め一時間おくり、汽車、東安路へ入る。鴨緑江と支那と朝鮮の結果より江を渡り

バ天地夏し風俗又改まる。今まじまじとアカシヤ柳り、柳村と夏し。白浪の人おき衣の人おと化す。沙河鎮、蛤蟆塘をこきり。黄梁を耕心す。北は温目の平野三四寸に刺るのみ。午時合巻に於て、麦酒酒杯を修け、室に帰る。睡眠を食ひ、是れ女中連山関に在り。午時午後三時二十五分也。改正時器、撥り四時本溪湖に着り。北は大会任官の煤城公司あり。是れ多内余を車内へ入り来る。世を領つて話す。煤及烟子を云ふ。ある記を記す。貯るは



そのと殊に自當也 銘と拾うらんキリア  
とあり、朝鮮大連ヤマトホテンに於て之を  
北東もあつと云ふ價百を九田と云ふ、河子  
の産する此地方に此價あり自當其地あり、  
余和田と欲ち其つ喫切に耽る、七時半奉  
天に着、停車時間一時ありを以つて車  
外に出つ、而しての未だ午を停車場所尾の  
ヤマトホテン一宮に入り酒果の饗を乞ふ、  
新ゆぬ人多くおれ道亦出向へゆると此に  
鞞旋す奉天の停車場より祝横頗る雄  
如く大陸の未だ思あふ、このも大連近  
後台を要するも一七ある無し唯此余一人

河子鶴しの申込つてまきなるが故に幸に得た  
の多仕合たりし、八時十五分汽車大連に  
向つてゆかす、而しての未だ午を別つて一行  
七十餘名あり余ひとり寝台に入つて早く眠  
る

二十八日 大連着

時四時半起床、得利寺より夜ぬく、公物  
に契致、初めは和田城を尋ね、今や  
新造時代を得たり、昔の地を尋ね、二  
十里甚、具わ子の強野を巡り、午前八  
時大連に着、校友依り木義山外務



日清生糸支社より横田瀧三郎の三回宛の出  
印を多うけ直に彦太木テルに投ず、今朝  
於て子林園在廳を右(権四)の英五公使に轉  
任出方之際しえ送る途上諸列する、彦太木テル  
一行も右泊りありん室敷ありき、金と坪谷々  
横田と致すもホテルの別館に移り、休憩後自  
動車を起り、金とを代表し、知多坪谷と此に  
民政四署、市役所、高業を、磯所湯城院、合  
社を、歴訪して挨拶をあり、湯城院院敷  
野村龍蔵、若くハ彦太木出身、今も一年  
先年との同言也、又湯城院院敷に松本丞治七郎  
人也、秘に投上田、森泰輔也、初見の人と云ふも

其の著書の上にて於て熟知の人也、十時より圖書  
館に於て大合會をつとむ、此の大会に支那  
人の出身十数人の多きあり、多くハ民間教  
育部面の人にして三四の者の式場にて祝辭  
を朗讀あり、式後諸列圖書を乞ふ、中に  
四庫全書一函あり、こゝに支那各列者が特  
に携へし書ものあり、此と奉天の文淵  
閣の四庫全書もの也、黄絹表装あり、書  
庫に入りて見よ、書架等米回巻の総織架にて  
流石に敷き置けり、此館の主として湯城の社  
用を修し、支那十数人の著書も、湯城の社  
の大合會より貸切電車にて一行星に備



外く今と和面塔を特待を考りけ自動車  
より別に行く、途中湯城の徑を去る係の中  
央試験場をみる、ガラスを吹くの上付大  
七具の味をうてる、此をガラスの原料  
矽石を中と云ふ、又湯城徑の沙河河口  
工場をみる、車輛検査車と作る也  
社宅北の今北一區をみる、徑の大通り  
北等見より星の池に到る、此地海濱に二  
三の小島あり、大連唯一の緑葉地なり、西洋  
旅館の設備あり、又湯城の徑を去る係、風  
物西洋より来るの念あり、此附に煤化造  
の貨物を見る、此附に似る一處を海濱の

大連市士と云ふの要塞地帯也、茶葉の製  
と考りけ、此と云ふ一行の来る、先此ら  
旅館のこころ、湯城會社も風景帳  
其の種々の茶葉書を贈る、今夜ヤマ  
トホテルの湯城の招待會あり、一行皆行く、  
廊下の十八年前の今日今日大連を占  
領しける其日に我々をみる、保死し  
るも六十年の也、其の會の上上田恭輔と云  
ふを論じ、朝上田のそのを語る、其花  
品をみることを約す、深更旅館にゆく、  
外す、此の後のそのをみる、其のそのを  
出す



二十九日

大連

時五時起床一浴後数日の終えしを以て  
 して投刺、三友木村茶市、親族海南花門来  
 訪、前夜の約を履み、和田と共に上田恭純  
 の宅を訪ふ、恭純均無研究、致味あり、花  
 する露の油名を多し、二時宵に海入り、十  
 此の油名を出し、示し且つ研究の結果を  
 語る、為め、夜明け方する所、約十時  
 旅終、こころ、横田井上(輝夫、岩倉麻子社取締役  
 後支那人)花園収も(日本三友薬業(株)来訪  
 横田花園の案内より余一行の列を脱し  
 大連卓頭：到り見る、刺を卓頭事務所

通す備、ある内を命せらるる、この後友を  
 送る原豊三郎と云ふ、便宜を得て連、築半  
 途の煉化造事務所の七階より、港灣  
 を瞰視す、一即大勢を知りを得たり、埠  
 頭地積四十八萬坪、野積の堆化貝五十  
 萬噸、多くハ豆粕肥料也、一倉庫の豆  
 粕を蓄する、不こ入り見、此の倉庫五千  
 四百坪、五萬噸を入ると云ふ、斯の倉庫  
 數あり、親族の大筋、大豆、豆粕  
 肥料ハ七個七貫目價二円二三十錢と云ふ  
 埠頭に使役する支那クレーリ約六千人  
 一境の後附近の三春油房を縦覧す、



此油房と三井と支那人の合併に係る、豆を田型  
に盛る機械よりけし、塵埃する一室に誘え  
入り見ると此室蒙る豆を煮火する湯氣を  
以つて湯さん中の一絲を肺につけざる骨格  
大なる裸支那人の立働くあり、六一種の奇観  
也、油を煮する一所に案内する大なる織袋  
の構四個を二百々、一槽八百石を納る四槽  
の房より不定に三千二百石也、此油は食用の  
七百斤十三四位と云ふ一説あり、自動車  
を認むる先角灘あり、こゝに又星浦に次  
くの娯楽場あり、海に臨み高丘あり、丘  
上二三の割烹亭あり、入つて午飯を喫

す、山の味噌汁を煮し之れを思ふこと  
切也、特之れを注文し換ふることに三回  
に及び漸やく湯を疑ふするを得たる、今  
日相生田太中(同者多社也)一行とせし  
ヤマトホテルに招待を多けたる也、此家  
りたる、乃ち夕暮る、旅館より横田  
流るりと流る、六時満ち、独書を此  
七時より、民政黨高井會、不市後所  
聯合主催の招待会、一行とせし、行々  
坊共和橋と云ふ、純支那式の割烹亭  
也、支那接客酒を助け、流を鳴らし、代  
く、龜の、此の大倉、矢し、支那人



七時過ぎ、一支那人酒蘭しして起つて、戦  
後の追分を歌ひ、懐多入り即ち其他の偽  
歌を唄ひの偽めを扱ひ、善しし車馬に  
遊子ちよりの、其名を李の漢字と云ふ、紀  
興酒に酌みせしむ、之ヤウザボン下河穢  
し、先と洗濯の時、さき、一旦を結ひ、  
價二十一円也

三十日

旅順

↓旅順戦跡を訪ふの日、偶々雨あり而し  
と豫定を羨すも能く、早起統束す、一行中  
の杉原貴栄(高尾山権の湯心司海)小林を介

して余とを清ふ、余則と清濁に居んこと  
を約す、七時五十分一行と共に満鐵借切の  
汽車に投し、七時、真糸子驛を以て、今波  
夏家河子、子城子、野の沼野とて、  
前者は、此の唯一の海兵沼城と云ふ、  
子城子附近の山上碑の記、主するもの  
を云ふ、皆戦跡を表するもの也、旅順に  
達し、九時十分、幸に雨雷  
尚ほ雨霧を帯び、以て、塵埃揚  
るが、日光の反射も微弱なり、登山し、  
尤も好都合也、旅順の野、昔、久保田金  
平と云ふものあり、戦跡を説くものあり



七姉也且つ就死あるに同傳無く、彼人の當時の状  
況を後述するともやまきり為涙せざるものありと云  
ふ、此駒長今日の東道より、先づ誘ひて白玉  
山に登り十数人の馬車一行を載せ余と塚谷  
先登りて東道驛に余等の馬車一行を宿し候  
つて車中程々の話ゆを聴く便を得たり  
東道駅長白田玉山と上る敷るありて也  
榎柗敷林の路傍のありと指點しを問  
こん閉塞船戦死者の屍体三十一の漂流  
敵手はあちなるを、敵人共勇に感し厚く  
葬り給ふ所也後白玉山上の塔内に改葬し  
る也遺址は存せり可なり、余殊に榎柗

を指し之れを表すと後、山上に成り、納骨  
物を拜す、こゝ忠勇義烈の英魂二萬四千  
人の眠る所也、塔と全四室の所為の義を  
を以つて成るとする、東道驛にこゝ一行  
を令り、眼下の山河を指點し、南時の家  
況を後述する所也、況を觀るが如し、彼ん況  
のこぼれん、其の感振する、愛言涙共に下るの  
概あり、人をしる容を改めし、一行を山上に  
行立し、志南山に峰を眼下に、閉塞  
船を浮舟内へ入るの困難を回想し、劍山  
南山の先づ奪取を要する形勢を實  
地に驗し、遠く二の三高地を望み、今



更らるる之れを占領するもの人智業ありあつたること  
ども思ひ低細なる能はざるもの之れを久あす  
午時喫飲のあめ山を下り、想えの旅順二  
科のあめを訪ふ、こゝを露回海兵六箇の病  
舎をる革命の遺物を授けて修補し、その校に  
充てたるものこそ、二科と云ふハエ、を云ふ也  
機械の設備頗る具り、大なる日昇格、  
取て不可なるきを感せしめ、一説り、  
博た彼に到り、其の別ををえ、こゝに一日午  
春す、午怒や、七東道驛長濱壇に登  
午後、はのへき二島山其他の戦跡に就き  
懇切に説く所あり、博た彼に、

紀念ありとし、別名をのふ禽を一行に欲し  
らんと、白玉山上の納骨塔に、平霧に迷ひ、  
微軀を打つけ、頸破れ、五臓崩れ、地下に  
墜つる、或千菊のふ禽を、別名し、  
こゝ一行の殉死鳥に、北鳥、  
つけ、志哉山、北鳥と傳つる、飛翔山東  
こ福、うんと、うる、余、北、  
死を、  
あ、  
飯の、  
き、  
今、







艦或は圍まりの動き得ることあり、善し旅  
順を不凍港とするの故にこゝにありたり、然  
と名づく凍死するものあり、其凍死するもの  
新のこゝとく水上に流るる後人争ふ之れを  
取る而して手と水中に入ると其或を凍  
傷を負ふものあり、戦血を混し出すもの  
の屋敷に不慮し、戦血を混し出すもの  
りたる先程敵艦の遺材を以つて先程し  
巻甚だ甚毒を購ふ、四時五十分一行と共  
に乗車大連に帰る、今夜一行の接待に  
努力する満鉄其他の人々二十名を交へ  
し宴會を辨くの企あり、余は校友會に臨  
しこの時刻と差合を生し、この後、龍  
行、す、八時、ヤマトホテルに校友會  
餘名室の結り余を招く余は早上一演  
説を試み、食後一同と款曉し十一時迄  
しと旅室に帰る。

三十一日

大連出發

明、今朝大連出發、先づ一行を代表し  
塔谷と共に市役所民政署満鉄本社回  
事館高書舎漱石を歴訪し、滞在の  
謝意を申し、横田の如き、前夜第一旅  
事の不逞を生せんことを慮り、所々



支店と云ふる國報新聞社の紙幣の借  
り多し、東京支店の方面に傳へるのき中  
物投郵、湯城支店も貯蓄えり、同  
るに漸く積りて堆積を為す、横國に  
托し七車ある後えせしむ、九時四十分  
一行とせしむ、奉天に向ふ、投反其化多  
敷の見送りあり、車中坪谷載る因交  
附、余のたえん今廿一を弁せんと托  
す、大連にも奉天にもあるの間日、戦後  
の戦跡多し、而して前日の夜中よりきり  
り所あり、今日、<sup>由</sup>白中馬の地國を棄し  
て、支店も知んことを、吾等も、同様の坪谷

●北の戦後に従軍し、傷ある者物を知り、  
余のたえん、到る處、支店のことを、後、詳あり  
也、余を益する、鮮のりあり、也、十時、  
金州を過り、いん、戦後我軍の先づ占  
領し、る也、ある我軍、極大澳より上陸  
就子宮を占領し、後、<sup>柳</sup>柳屯を占  
領す、而してある、昔、<sup>南</sup>南山の戦  
也、三十里堡、昔、某支店を、<sup>善</sup>善、  
店、我軍の敵物アリキ、<sup>フ</sup>フを、<sup>三</sup>三、  
高也、瓦房店を、<sup>午</sup>午、<sup>三</sup>三、  
時、<sup>三</sup>三、<sup>高</sup>高、<sup>梨</sup>梨、<sup>果</sup>果、<sup>梨</sup>梨、<sup>酒</sup>酒、<sup>を</sup>を、<sup>三</sup>三、  
高、<sup>高</sup>高、<sup>の</sup>の、<sup>未</sup>未、<sup>の</sup>の、<sup>四</sup>四、<sup>的</sup>的、<sup>大</sup>大、<sup>石</sup>石、<sup>橋</sup>橋、<sup>を</sup>を、<sup>三</sup>三、<sup>北</sup>北



地を於ては、この邊の兒の子、後反鏡、龍高  
年敵、ぬのうを、お記し、後、えうも、を、記  
の、後、郵、す、北、地、の、兵、口、に、至、る、鉄、路、の、合、攻  
線、也、干、山、截、山、底、を、通、く、後、者、は、湯、城、經、  
營、の、精、練、を、有、り、規模、大、也、而、も、子、出、り、  
法、價、下、る、爲、に、往、る、も、困、難、を、告、げ、ま、ん、と、大、部  
を、休、止、の、状、態、を、有、り、惜、ま、し、向、陽、子、を、と、り、  
こ、の、静、を、聯、隊、全、滅、の、捲、る、を、演、ず、今、  
山、上、の、一、碑、を、立、る、乃、ち、之、ん、の、紀、念、也、又、昔、山  
堡、を、望、む、北、山、唐、太、宗、亦、向、龍、を、攻、む、時、  
駐、驛、の、所、を、一、名、駐、驛、山、と、云、ふ、の、日、饒、の、戰、  
役、我、軍、苦、敵、の、地、を、終、に、奪、取、陽、と、達、

す、り、露、の、戰、役、の、於、て、あ、る、大、鏡、  
模、の、敵、陣、を、交、え、ぬ、も、此、地、を、我、軍、が、  
時、の、戰、略、の、奥、野、津、に、軍、木、の、三、軍、三、方、  
り、敵、を、包、圍、す、三、軍、の、兵、數、約、二、十、萬、人、  
三、軍、中、軍、木、の、一、軍、敵、の、背、後、に、出、て、敵、の、  
退、路、を、絶、人、と、す、敵、の、其、の、兵、の、出、て、  
る、處、を、合、兵、を、鐵、路、に、下、り、退、却、す、若、し、  
退、却、せ、ん、ば、敵、の、全、部、我、の、捕、虜、を、有、り、  
る、ん、此、の、一、戰、の、全、局、を、決、し、ぬ、も、の、と、も、謂、  
ふ、を、得、べ、し、北、驛、に、若、干、の、停、車、時、を、有、  
り、下、車、し、て、白、塔、を、望、む、一、武、人、の、余、は、  
刺、を、通、す、も、の、さ、う、刺、を、捨、て、ん、は、陸、軍、



二等軍醫西木村元吉、則ち田中吃一郎の親族也。暫時談笑して遊ぶ。此驛、野に多内、迎へるの爲め、十時、同車、九時奉天、有る、校友石田武彦、外二三名、停車、出迎へる、ゆゑ、石田と共に、余の爲め、定め、更き、旅、瀋陽、投、浴後、中、昔と一杯を、飲、け、下、一時、寝、て、就、く、此、旅、設、備、古、し、神、の、二、室、の、日、を、万、の、お、一、室、西、洋、式、の、客、室、を、附、属、せ、り、。寝、後、雷、鳴、雨、降、る。

六月

一日

奉天滞在

六時起床、朝食、の、閑、と、得、る、用、人、の、鳴、き、聲、揮、毫、四、枚、成、る、。少、希、堅、三、身、の、押、さ、も、を、交、付、す、。此、時、本、日、一、行、の、日、程、を、外、一、時、の、茶、内、の、任、務、を、お、説、を、為、し、決、し、馬、車、と、俄、ち、此、の、日、本、人、之、貴、重、鐘、好、古、堂、を、訪、ふ、。古、玩、と、観、る、同、人、五、七、段、に、此、鐘、に、在、り、玉、印、を、取、り、を、贈、り、野、の、名、を、訪、ふ、。暫、時、話、す、。余、も、細、入、り、白、絹、酒、一、反、を、贈、り、寸、帖、(大、般、流、目、録)、寸、冊、佩、文、詩、歌、を、贈、り、。辞、し、て、四、口、と、馬、車、に、同、乗、大、西、門、に、入、り、城、壁、を、過、る。



雑多店工夫市と見え、こん俗な泥棒市と鳴  
あつものころ、ぬすの人のこころのうらみ、砂を披き金  
を得るものあつし、軒を並ぶる小店行々の  
物をとるる皆品物住する、泥棒市の名ある  
所以也此を蕪穢を極め臭氣白鼻と撲つ  
十数軒をいひ、一七賄ひに送るものあり  
午時石田武家、招へん松竹亭と云ふ支  
那料理店、中と共、行く、支那校友園  
康澤下、終陶高銘の外上田正提作、  
四郎の校長も来り会す、会合二時、河  
談笑頭、興致を完の、三時、中並に、河  
澤一と東道と、宮殿見物と北五丁と東

す、先の大法院に入る、乾隆宸翰正大光明の  
額と掲ぐ、崇文殿に玉座あり、左右に乾隆御  
筆の聯あり、殿後、法堂あり、左右の  
二宮右を院、昨左を麟趾と云ふ、龍家場あり、  
其奥、文淵閣あり、すゝと親操大と云ふ  
北宮あり、比、すゝの筆院、頤の遊と云ふ  
と、昔も初め、支那宮、殿をえ、  
興味あるべき能はず、文淵閣と云ふと、四庫全  
書を納む、表世凱北宮、持ち去り、  
一物あるも、唯、閣内、塵埃堆を為す、  
る、此の閣の、一碑、意、乾隆四年  
四十七年の、建設、係り、乾隆御筆と云ふ







市と記し、去つて昭陵を訪ふ、昭陵或は北陵  
と云ふ、東方に福陵あり、之れを東陵と云ふ、  
昭陵外に永陵あり、合せて三陵と云ふ、東陵  
永陵、地涌り、継親を得ず、北陵と云ふ、他  
を推す、し、昭陵、太宗文皇帝孝端文皇  
后の神位を奉ずる所、順治八年、成ると云ふ、  
廟の前、大理石の牌樓あり、拜殿の前庭、象  
子等の大彫刻、左右に列す、頗る壯觀也、橋と  
多く、石壁の上に梁あり、壁上高架道あり、幅  
多く、教人駢立するを得べく、此道を歩して、背後  
の陵墓に達す、陵墓、大なる土饅頭也、橋  
沿の扉瓦、黄緑二色彩り、壯麗觀ふべし、

境内松樹多し、一大豊碑あり、太宗文皇帝之  
陵と刻り、其満漢三程の細字刻あり、五  
色の塗料を施しあり、一覽後境内草生、吐  
く行厨を削ぐ、と兒群集、厠あり、帰路一  
行七十餘名を代表し、坪谷とせ、交渉需民政  
需満鐵支所、張都統等を歴訪、挨拶を為  
す、午後和州坪谷と三太の岳を訪ふ、三太は  
副都統より、支代、均奎、溪と云ふ、曲園の高足  
らう、守田福松と云ふ、殿酒、三太は親交あり、金等  
のたぐい、特に来り、道沿の石を取る、此人多く  
各畫を花す、此の石所左の如し

扇面林 黃道(古跡) 王鐸(古跡)



壬船山(書稿)

傳山(書)

劉正宗(書)

西峯山(書)

虞沅(画)

陳嘉謨

陳嘉謨

其昌

南亭山人(寫風稿)画冊 八大山人画冊

新羅文幅

寓目書画の用尤も銘心のものを扇面帖也此  
尤も扇面に高古花鳥多所千と云ふ所  
天鼓有金長くおん一行七十餘名高壽師範  
之をせけき其の両天體操坊に支那精妙  
理の響をを多く、此今早魁、支那新画の  
場習あり友余屠殺を禁する、今日の支那側根  
待に精妙の料理を用ふる所以也、又刻物  
ヤ林澄三東城、ヤ林と名の千と合す、森内也、

向うをかし余北条とある、若千の者、  
北条に托し、野口曼由余の東道、  
と同行と決り、和向者、其の夜平懐に立  
字あり、内地、海と別を出入る

三日

昨早朝起床、師室の親戚友人、其れ二十餘  
通の、其れを、満洲日、記着、  
其れ、北条出、見、行李を、神、  
旅、佛、代、五、茶、  
廿、下、十、天津、汽、



三十日、こゝろと日本貨物船「通用」の交換  
 する他、全斗上し、一切の荷物を托す。十時四  
 十分を天母車、校友の送る来るもの数名  
 一行、跡の外余共十人、坪谷、今井、豊一、永田、  
 三、中、吉田、亀、壽、那、須、源、吾、橋、井、清、五、ら、栗  
 山、清、五、ら、中、里、日、結、是、ん、也、此、の、今、井、永、田、ら  
 大波、り、入、る、那、須、ら、細、取、初、尾、橋、井、栗、山、ら  
 初、尾、の、人、栗、山、ら、洋、画、家、中、中、里、ら、日、宗、結  
 侶、也、出、発、に、臨、み、一、次、栗、山、北、京、に、汽、車、賃、の、二  
 重、拂、也、在、天、母、在、守、余、坪、谷、と、説、わ、る、を、異、り、  
 疏、通、を、大、き、に、な、る、は、谷、余、の、如、く、切、符、を、  
 此、の、し、車、賃、と、い、は、し、る、事、中、結、今、も、又、お、求

め、り、る、車、賃、の、際、終、に、元、戻、す、こ、と、結、の  
 車、賃、に、他、日、償、現、せん、こ、と、を、托、す、北、京、行、汽  
 車、ハ、支、那、の、行、程、に、属、し、英、國、式、の、汽、車、  
 等、寝、さ、の、内、部、の、排、氣、甚、に、油、の、外、回、經、  
 路、の、汽、車、に、乗、る、こ、ん、ら、嫌、め、也、車、中、  
 日、本、後、も、ち、が、如、し、し、日、本、後、力  
 の、漸、や、く、能、る、を、感、ず、十二、時、新、民、館、を  
 過、き、今、夜、に、入、る、事、一、行、中、余、坪、谷、跡、の、  
 寝、さ、を、有、す、の、外、皆、こ、の、存、り、初、め、  
 の、子、の、あ、ら、ま、り、と、思、ひ、な、る、し、其、  
 の、時、傍、ら、荷、物、の、あ、る、を、見、て、此、お、同、人、の、  
 有、る、を、さ、う、こ、と、を、知、り、氣、を、し、甚、に、感、



より、新民報附道一面河漢の如き観あり  
遼河汎濫の點々としてその跡は曰く在り京  
間の汽車、往と復と運賃同じしと云ふと余  
其の由を問ふ、曰く北京の銀と基礎として兌換  
券を發行す、而して在り天の紙幣、然るに然  
るん張作霖の銀紙の間に差違ありあるを許  
さぬ、ん後後車、貨の異ちる所は也、斯の如  
きハ張の徳政の一と云見らばき、關外といふ  
るも同じ支那に北の不同あり、死に多日本お  
連時代論著各々知らざるを異するに似たり、  
午後三時溝邦子をこく、翌日の合波駈り、  
四時四十五分錦縣に着き、停車中定めて、田錐狀

の一大古塔を望む、ん錦州城也此地を奉天  
山海關間なる高粱の地なり、露西五の私寫  
婦人あり高粱の地なり、外事を扱ひ未り  
噂々私談を絶ひ、余やきりて坐睡完  
めたる時、三時定めて、連山灣を地眺  
み、こゝは良港なり支那海灣の便をみる  
と、あつて良港なり、木の橋、當つてこゝに  
港を築かんとして成り、其後支那政府  
又築港と思ひ、主ち大連と抗多し、んとす、賦  
以困難の如く遂行し得ず、然らずと云ふ、  
六時半官平遠二府をこき、海城縣に到り、  
車に入る、同人を会せたり、九時山海關に



着す、この常里の古塚の門よりうらむも木陰風  
景を看<sup>取</sup>す、能うう時々の雲の月を賞す  
の耳、北関をるとき、夜をこへり臥す、終て熟睡  
を得、唐山の山を初め、北地開平炭坑の  
あるをみる

四日

天津

明朝七時天津着、税関吏車向に入り、来り検閲  
を为り、停車場に乘車、乗車宏(日暮  
公論社)倉田悠延(河生会)又佐二三校友の  
出迎あり、乘車と北京在るの、偶り耳疾、治  
療を乞ふ、こゝに数日前よりこゝにあり、おるに

の也、直に常里へホテ、投す、日本旅館に  
没付、調ひ、懐會心をもつ、浴後朝、おをら  
し、校友と前念の日程を定む、先づ小倉又  
ち此方、船の期も照合せんことを求め、ち  
時、心の念中、天津に再来、其校友会に  
出席を謀す、馬車と偲つて、総領事館を  
訪ひ、船津、総領事館に面す、又々、同者、彼高  
品館を訪ひ、特に者長、葛瑞の庭園の觀  
望を許す、又々、天津の廟を参拜す、  
此の廟祠、勅建に係り、祠堂の入口、標し、勅  
建李文忠公祠と云ふ、堂内、詔勅の扁額三面  
「功昭翊賛」の宸翰、額面を掲ぐ、他、二六七の



巨類を掲げ、其文ニ云ク、「中外一人」「名震寰球」  
「中興柱石」「再造玄黃」「氣作山河」「何れも李  
の功績を表彰せざる可し、堂前に六角をあり  
リキニ豊碑を置き、上諭を刻す、又西側に李  
の功績を刻したる十数之碑あり、堂内の壁に  
露終の文を録す、日清之役李の本意にあり  
たることを云々す、其本意何を知らずと云々李  
ハ清國近世の俊傑なることを論ずるを要せり、  
此の初坐のあり所の李子の官邸あり、李の朝  
夕散策の庭園尚存す、池中ニ亭榭あり、觀  
月亭と云ふ、正午総領事の午會會に觀  
茶竹林の官邸に到り、此午會會に食卓を

此ふもの一行の外に石津、尾崎（日本郵船  
天津支店長）阪本信一（天津住友洋行）八角  
三郎（駐友日本公使館付海軍武官）等あり  
又校友矢澤某も来り、今更に、  
招き、余主賓座あり、我々此杯の辭を述  
ぶ、四時十分天津を辭し、北京に向つて、  
又喜田等も同行、天津より北京行の汽車  
ハ東站より発す、豊台の駅より永定門を距  
り、又天津を距り、七時五十分北京前門着  
校友永持徳一も同行、一行自動車と走り  
ペキン飯店（ホテル）に投り、此ホテルハ東洋本  
一の大旅館より六層樓あり、室内の設備



萬端より神心、神が一切佛回り来ると云ふ、  
宿泊者余等一行の外皆外人なり、余等も人  
（坂谷と余）の室は三階に在り、ある二室を占む、  
外に一室の衣箱所を譲り、上下皆昇降器に  
ある宛然西洋に在るに如し、着後、栗田に招ら  
る野口と共に日本料理店、長春亭に飲む、  
校書三四来りて酒を翫く、十一時野口と帰る  
り臥す

五日

北京

晴、一行の同人五名階下の室に在り、着後初め、命  
す、共二六階の西窓台より市街を俯瞰し、初め

て宮殿のホレン地、あるを知る、黄基、後丁  
ニ涉り、天日、映り、壯觀名状の外に在り、又此の  
まき、登り、北京市中、意のする樹木の多きを知  
たり、朝、栗田、後、坂谷、野口と馬車を共に、栗  
田の僑長と訪ひ、栗田と誘ひ、陸宗輿、劉宗  
傑、公使館を歴訪し、陸宗輿と握手し、公  
使館、日と徳川公正山、内四郎、深澤、是  
等の書記官と面す、又、栗田、一郎と訪ひ、栗田  
の支那の法律顧問、早稲田、大子と、森田、保  
あり、一時、旅館に帰る、栗田、四郎と、食事をと  
り、午後、宮殿を見物し、野口、栗田、等を東  
道、旅館を出し、先づ、東華門に入り、文華



殿武英殿煥章殿凝道殿等古物の陳列  
あり、又此内文華殿の書画陳列ハ尤も見るべき  
もの多しと云へる或る朝臣の外殿覽を許さざ  
と聽きし、此日ハ幸入るを許さんなり、流石  
ハ殿内善院を極め、一ノ名畫を多く陳  
列す、陳列の式略り我々傳物館ハ同じ、寫  
目の送品の二三を録すんば、趙子昂の春  
経養ル圖六體子文(同上)王冕の画卷、宋  
馬和之「秋風倚杖」の唐寅「雨後澤烟樹」  
鄭熙の「寒林圖道」沈石田「田相蔭  
大幅唐戴嵩牛圖、沈石田「田相蔭  
玩鶴」明陳淳花鳥、宋趙大年春山晴

羽亭一巻、宋蔡襄臨鐘繇一巻、蘇軾  
人物小品(諸家の題跋を多く附す)蘇軾の  
書畫の倪雲林「菊壺秋亭」等あり、又ゴブ  
ラニ四枚の壁ありと認めたり、文華殿の  
奥ハ文淵閣あり入ると許さんハ外部殿の  
善院あり、文華殿の左側に集義殿あり  
佛像を置き、壁上ハ仙人羅漢の圖を掲ぐ、  
太和殿ハ玉座あり、規模亦大也此奥ハ中  
和殿あり、こゝも玉座を置き、又其奥ハ保和  
殿あり、更なる骨董を陳列する三殿あり、  
刊り見ると武英殿ハ雜物の骨董を置き  
煥章殿より西ハ銅器、凝道殿より七



寶の器を陳ぬたり、此の三殿に可く所の中の  
ハ玉石彫り混清の觀あり、殊に時代の差を  
知る作多く、銅器彫り肉無漢器と稱  
する者少く、さうし、七多々の偽物と思ふ  
たり、またこれを觀りし沈思し、何物か逸品  
たりやと自問自答するは、大張宮殿其物尤  
も優るなり、大骨董も文華殿の列品  
之れも次くとそのを公評と為すべし、爰に  
一事の録すべきものあり、浴徳堂と題し、此  
る石造の浴室なり、入り見ゆ、恰も堡壘  
の如し、こゝに土耳其風をさす、清帝の統  
姫に土耳古美人あり、其婦人の為り、特

設く、云ふ、西華門を去り中央公園に入る  
是れ乃ち禁苑なり、園内を道と稱す、其夾む  
て柏樹蔭を有り、樹下に茶亭あり、多く  
藤椅子を置き、客を待つ、お人の多し、  
来り晏樂するもの見るを以て、數の真  
に公園なるの面目あり、余等も亦一茶亭に  
入り、早を園とあり、西瓜の種を吐き出し  
茶を啜る、亦一種の趣味を云ふ、此公園に  
入り、十銭の入園料を課す、労働者の  
此き下級人の入るを厭ふと云ふ、公  
園の出口に大理石の門あり、公理戦捷の  
四字を刻す、善し、戦捷紀念の門なり、



東道の後をゆくも、いんちと獨逸の戦捷  
を記念するといふに、別處に設けざるもの獨  
逸今今次の大戦に敗るゝといふ進んで聯軍  
之んを毀ゆんと欲す、民國を請ひ受け  
其材を以つて地を築に相<sup>建</sup>つと云  
更なる馬車と記り江庸(前司法総長  
日本にありし時、尚學生を監督し、人々  
震(大理院長)江天鐸(農商務次官)陸  
夢熊(交通部筆頭)官を歴訪す、皆  
我早稲田大の出身なり、七時迄談話あり  
、浴後同宿の一行と食む、於て晩飯  
を共にす、奏樂の間に杯を奉ぐ、一日の  
労を慰むるは、是の食後外人の舞踏あり、  
夜勞を感し早く臥す、今夜野口ホテル  
を去り、素田の家に向す。

六日 北京

早起、冷たい風、十数葉を認め、ちかぶるに、ゆるぎ  
推乃世帯の名刺、筆墨きき、急遽印刷を托す、予  
クタイ汚損、因ふ可からぬ、此に托し、購ひ入る、今  
日一行七人、嵩壽山其他を訪んと欲し、ホ  
テルのガイドを付ひ、自動車二台を働ひ、ハ  
時三十分、旅館を發し、先づ喇嘛寺を訪ふ、  
此の寺ハ雍和宮と云ふ、善し、宮殿を以つて



寺に元七なるもの也。屋瓦皆黄、乾隆五十七年  
勅建の碑あり四面に四面の文字を以つて喇  
嘛説を刻す。喇嘛ハ紅教或ハ黄教と云ふ  
西藏の宗教也。乾隆帝の此の宗教を支  
那に導き之んを優遇したると云ふ。西太后  
の政略と見るべき歟。室内釋尊と安置す  
の外、タライラマの像を安置し、男女相擁す  
るあやしき幾多の像あり之んを歡喜天と云  
ふ。僧ハ黄帽を冠り紅衣を着く、祭服  
器の向ふと人間の頸蓋肉を以つて作り  
酒杯あり人の皮を以つて作りたる太鼓あり、  
室内幾十を以つて数ある大小の樓閣、其の

置く所の者ハ概放以上の如く、一間に安置する  
白檀塗りの大佛像ハ一木の心柱を以つて  
作りたりと稱せし大五丈あり、又関帝を  
祭りたる七あり、刺繍の大曼多羅、紺紙の  
貝多羅經、等性を見るべきもの無きものあり  
らしかと云ふ。帝室の保護に依頼せる此の書  
大伽藍七一朝より保護を離れしハ自ら  
支ふる由なく、多くの寶物を土賣却せし  
堂宇を頽廢せしむ、今も唯此舊時の  
柱觀を想像するのみ、偶々僧の佛前  
禮拜法儀するを見、その瓜佛僧と大  
差を見ず、唯此離僧等三三五五の賄給を



為すものあり、教銭を投け、其のいひ、群僧争  
ふこと之れを得んと欲し、終に格闘を始す、醜  
態唾棄すべし也。一覽終り孔子の廟を  
訪ふ、此の二郭ハ門も本殿も赤色を塗るの  
外、他は裝飾を用ひず、境内も古柏蒼然  
として天を遮り、流石に起俗者雅の氣分  
漲き、堂内も至聖の神位を置くの外、他  
に十哲を始の大儒の神位を置くの外、他  
俗眼を喜ばすもの一もあらず、境内も  
十教基の豊碑一あり、側に駢立し、各碑細  
字の姓氏を刻するものハ進士及弟の人  
名と知る、門の一隅に二種の石鼓を有

す、門内もあらず、原石も門外も摸石也  
余石鼓を覓んことを欲する年あり、今初  
めて府者の印を乞ひ、得て快言あり、可  
から、廟を出て附近の鐘樓鼓樓を一覽し  
西直門を出る、こゝに初め城外に出る、こ  
んと萬壽山近約三里自動車と馳せ十  
一時二十分漸やく達す、此の離宮、嘉祿の標  
本として、跡も若石のこゝの地、日西山の林在  
り、元時代、龍泉山と云ふ離宮、乾隆年宮に  
清漪園と名を改め、離宮を置き、以来歷  
朝、城の行樂の地とす、然るに、維新其傳、  
全軍、園の園を劫火に附し、こゝに夏宮に



ひつり西太后海軍擴張費を投じて改築し  
頤和園と改称すまゝ至り現在の壯觀を呈す  
又むらゝ園の附近に涵虚と是を号する一大牌  
橋あり、之を過りてこの南門に向くハ門の正  
面ニ門と同じ大きさの影壁あり、門を入り  
づ見ると仁壽殿あり、この臣下ニ謁見を賜ふ  
所なり左右にあり、右廂ハ賜饌の室なり、殿  
前より銅獅の風と龍とを置く、更に  
進めば樂壽堂と稱する宮殿あり、こゝに  
仁壽殿ニ謁見を賜ひ後又親しく引見  
せしむ所なり、堂の前ニ巨大なる泰山  
石あり、影壁ニ充り、此の附近に瀛洲坊

あり、まゝに對して觀望せらる、樂壽  
堂の後ろに一殿あり、西太后の便殿なり、  
此の殿の影壁を掲ぐ、何んも華麗なり  
と云、清朝末路の統持するもの故、雅緻に  
乏しく彩色裝飾、寧ろ俗態と評すま  
外より以上の素諦所とも云ふべく、更に奥  
深く進めば后の後宮とも云ふべき排雲殿あ  
り、こゝに、后の影壁を掲ぐ、其後ろの一  
殿ハ皇上の便殿なり、左右に此系雲、芳輝  
の二殿あり、此の一方昆明湖を望み、臨み、  
教所の長廊下り湖に流れて、凡日柔佳苑  
なり、更らゝ仰ぎ見れば、鶯佛堂、佛香閣、



千青の山にありて其の瓦と五  
彩の裝飾は目を眩せん計りさう、式十階  
を登り漸やく達すんに巨大の石碑あり、萬  
壽山昆明湖の字も刻り蓋は龍の形さう、  
此の巨石を下りて運びたる人力の程思ひを  
らる、総じて山上の巨大の石を多く移る  
重荷を胎内潜りを作り一上一下歩せし  
ある設計ありて無益の多し、人力をかりたる  
一大標本とも見るべし、少しくよれば寶雲  
閣あり規模大なるも全閣銅朱あり、  
佛光閣の佛像三体をあつらひ、佛塔を  
言ふ者佛を四尊と扁して衆香界と云ふ、

格

此の二閣の建築意匠は二種の特徴あり注云  
すべきものさう、此寺諸閣の上、立つて下瞰  
せん、瓦の諸殿眼下ありて蜿蜒なる  
長廊下を、長虹の如し、一方昆明湖を望  
めば、遠光滄海と彩の梅閣を映して美観  
麗なるものあり、真に阿房宮再現の思  
あり、下つて長廊下を飽くまひ歩し漸やく  
湖畔に出れば、亭の欄をのぼる、浮ゆる石舟  
あり、卒然として見れば、棹して湖を渡り  
り得んと思ふ、而して遠視するに舟形の石亭  
あり、舟中樓あり上へし、殿を履くと梅  
上の椅子に坐し四方を望めば、湖心に一島

鶴



あり龍王の廟を置きて、一方より又玉泉山の  
高塔を望み湖の四周柳條慈を曳き水に  
浴せんとす、之れを我東台の池に比すんハ祝  
横臥り大なる、然るも儼りま之んを以つて  
比較すんハ龍廟ハ亦元々湖畔の萬  
壽山と東觀山とも見ゆるんハ、唯壯麗の  
川の流ありとて、今何せん、こゝハ風光を  
賞し、行厨を開く、なす中一行七人を揜す  
るハ栗山清太郎を瀬く待せとも来り、披者  
れも終に得ず、一行皆百夏ハ公後齋路  
孰くを興りし、舟行前岸に在ん  
とを乘し、船を傾け湖を流る、又舟中の

一快也東道者船中、流りて回く、昔し漢の  
武帝昆の池に舟船操縦の法を以てし、  
乾隆帝ハ其法を倣らば、こゝハ湖を  
穿つて北に舟練を習はしむ、此湖ハ漢の  
舊名を所<sup>レ</sup>得る所以こと又回く此の湖を穿  
らる土、<sup>龍王</sup>龍王壽山を築り、<sup>龍王</sup>龍王と  
又回く西大石在世の時此の龍名に行幸の  
公と御料の船に在りてと例とし、南園  
湖を繞るるのち堤より、敵軍の兵を羅列  
し壯觀を極めたりと、其御料の船に在る船  
庫に花よりと、船をやうに陸に達す、又自  
動車を駛り玉泉山に赴く、此處ハ金時



代行宮の跡ありて康熙十九年離宮を設け澄心閣と名け後靜明園と改めり今ハ静廓一と宮閣を断礎を存するは唯然れども二基の高塔像如くして存す、一は善花海と云ふ大理石の佛像を刻し等七重塔なり他の一は玉尖峯塔と云ふ又七重なり、共々金代の建設に係る在二塔の内視瞻を任るるを前者あり、此の山下に池あり清泉分土出ず池邊に乾隆御筆の碑立つ文云く玉泉駒突、又天下才一泉の記を刻しなる碑あり、此の流るる昆の池に注ぐと云ふ此山中に一字の物なき道所あり入りて見んは乃ち北流ありを利用しとらふ子を告るし塔あり、辭

一去つて帰路に就く時正に四時に達し、而して尚ほ見視遠す大ききもの二を剩す曰く北海曰く天壇と云ふ、北海ハ宮城内玉泉大流池の一部を云ふ、池ハ五龍亭、葦園、瀛台の三不令ん北海、中海、南海の名を以つて呼ぶ、北海を即ち五龍亭高亭下の橋あり所なり、積石平門、入んハ石橋あり、橋上静明末の君主が悲塔の最後を遂げらうと云ふを以つて名ある景山を望む、池に沼ありアトリ形に起しなる橋あり、五移の裝飾池形に映す、之れも珉石照橋と云ふ扁額に云く湖天浮玉、末葉静龍亭と、宛然と龍



宮也、余笑つて一行を遣ふ、此をの工凡り芝居  
こりり、道邊坊士を付めて一晩せし  
めせり、一を遣へ成とせりと、一行皆首肯す  
又自動車を駆り天壇に到り、正陽門の南、  
永定門内より、水の永樂寺十八年、又建設す  
る所より支那に於て最も神聖の處とす、  
境内の庭あり、東京の麻布練兵場と幾倍  
し、そのものあり、繞るすに垣牆を以てし、内を  
古來谷所を穿ん、森林あり、人を以て崇  
の威、保く、かくあり、天子皇天上帝を  
祀るの處として齋宮あり、園丘あり、皇乾殿あり  
り祀年殿あり、園丘とす、その即ち天壇とす、

壇、大理石を以て三、殿に築き、殿の大方、  
さう、あち内記に據る、最下殿の徑二十一丈  
中殿の徑十五丈、上殿の徑九丈、高さ一丈五尺と  
す、殿上別にあり、皇乾殿ハ歷朝天子  
の神位を安置する所、毎年冬至至神  
位を園丘に移し、天子親祭する、この例也、祀年  
殿ハ園丘と略々同一、壇上と築き、  
を、毎年一月廿七日、皇乾殿の神位を  
こ、移し、皇帝親々四億其生の如く  
五穀の豊饒を祈死する所也、屋瓦瑠璃  
色、壯麗、日光を眩す、此境内より玉  
座を置く所あり、帷次と稱し、皇帝の帷

の形四



舎を設くる所あり石を以つて築き石欄を以つて繞らし、犠牲を祀りする宰牲亭あり神庫樂為庫等あり、四流石に神聖の場なり故に俗衆の蹂躪を免ふ、今方一種の威光を存するハ殊勝と云ふべし、觀覽中驟雨を催し雷鳴轟轟、日亦漸やく傾かんとす、乃ち爰皇自動車と驅り旋鈴こころの時六時をこく、三十分、身体疲勞を以ての外、外出中今園壽庵より自若偽學年表を贈る、天津校友ハ倉章宏より十三日朝井至北丸ち此出帆を報し来り、又支那人校友ハ七時半後七時振定の内幕

内狀来り、又傳狀其案

東興樓に振定の書封来り、この分を一行一曰くあり也、河もよく幸田野は来り、余也、於て會食、食後今園壽庵来り、訖、常壽山に失ひ、同人ハ同山の帰途、途上、於て見る見、漸やく降心なり、就寝後、雷雨を電流あり、昨日正午陳寶琛其私宅に余を招き、午飯を給する由、通駕あり、傳に招き、その時刻と同あり、為り、傳を辞し、陳の招きに應ずることあり

七日

北京



時・朝・法<sup>臣</sup>國法律顧問岩田一印才訪、岩田の  
後、谷と共に中山龍沢を訪ふ中山、田の一人と  
國交通部の顧問也。十時を以て日人一行清史館  
を訪ふ、清朝史編纂所也。支那の例前朝の  
歴史を編終するを以て後朝の任とす。こゝに  
北の故のあり所以也。館の總裁ハ趙爾巽、  
余等一行を一室に迎ひ、茶間修史の事を質  
問し、信ら我邦論史なるが、野に及内を通  
譯とす。余專ら应酬の衝に當る。趙の語  
るを聴き、略々支那修史の順序を訊るを  
得たり。約言するハ支那の史料、毎日國子監の  
擔任を編纂所とす。朝の代々略る

編纂所とす。史料と修め且つ整理のことと云ふ趣  
向るハ庶幾し。先づ帝の實録著るハ乾隆注  
八日一夜に作らん。各大臣の奏議の類ハ其折々  
を編纂所とす。各省各官衙の章要事項も  
其日く、國子監より編纂所を以て切臣の事  
蹟文集の如きも其人の歿するまで之れを徵  
し之れを編纂する。例として史料は日又編纂所とす  
九つ、あるが故に。修史事業ハ刻念に。容  
易なるハ似たり。余趙に問ふ、民國に後、代ハ  
この時代ハ恰も我維新時代と云ふ。之れを  
遺憾なく直筆し得るや如何と。趙笑ふ  
曰く、尚と云難し。その人あるが、尚出しく云



難き所ありと左にありん、越又史料芻料に就  
て述べ、山本清直衛電報に「うう事と安す  
る歎あり」といふ、喫緊の史料と云す  
こと多しと、ありとも然らざる、余問ふに曰く貴  
國に修史の材料に新多記事を採りや否や、訪  
問支那の新聞紙を印綴して未だ材料と  
するの程に及ばざる、唯此採るものも月  
摺(官報)のみと、談論三十分、語り、越の先  
道するは「**行史料**」等と存する、吾庫に  
入る、これに國子監附屬の「**行**」を「**行**」の  
視、其をも「**行**」と「**行**」を「**行**」の「**行**」、**無教**  
の「**行**」に「**行**」を「**行**」の「**行**」也、**行**の「**行**」

行史料行到傳之部、數十冊と卓上に出し示  
す、これと未二行と之の「**行**」の面目今も四  
庫全書と一般の「**行**」の「**行**」の「**行**」の「**行**」  
流に「**行**」支那也と「**行**」を「**行**」の「**行**」の「**行**」  
修史の体、不相乗史記の例に因り、最早  
八九身分より「**行**」を「**行**」の「**行**」の「**行**」の「**行**」  
の「**行**」の「**行**」の「**行**」の「**行**」の「**行**」の「**行**」  
種々の冊を「**行**」し見、其「**行**」の「**行**」の「**行**」  
奏、**行**部類の「**行**」の「**行**」の「**行**」の「**行**」の「**行**」  
内を一説し、語り、**行**の「**行**」の「**行**」の「**行**」  
こゝに「**行**」の「**行**」の「**行**」の「**行**」の「**行**」の「**行**」  
り、編輯の上座にある者、一人一人を「**行**」の「**行**」



め或二人一章をよめ、入口に其名を署し、  
 札を掲ぐ、諸の紙以て馬通伯と揮筆す  
 此人編輯と統べ居る由を認め、そのある  
 しき高稚の人品也、年輩ハ七十又ハ、  
 名を其永と云ふ、一同諸馬を圍りて同人  
 携帶の書を平杖を以て紀念撮り、  
 諸君と詩史日録、并に編者例を贈ら  
 ず、此を同人と別れ、余ハ野ハ、伴ハ、  
 琛を訪ふ、素四先づて陳氏の家ニ在り、陳ハ  
 宣統帝の師傳を毎日早朝進講を例とし、  
 今尚辨髪を存し、齡七十を記せり、高は  
 明更鑠らう、家長の摸状も其相成り、  
 二人：對す、態度ハ鷹揚を極め、淡泊也、  
 此人書画と嗜み、花ある所甚に多く、余法不  
 て、荒干の古画と見る、中ニ逸者あり、殊ニ画  
 卷中無延の者多し、  
 寓目の一二を採す  
 の左の如し

元墨龍(許震) 草十人抄 那物 老物

黄鶴山推 山あり 老物

王時叔青綠山水 王雲舟題字 横卷

江南春 倪雲存 横卷

文徵明画 沈石田詩題跋 横卷

王石谷雪景圖 畫 横卷

明人松山陳洪綏仙女圖 一幅



唐摺千福寺法帖 朱之善其他の大家の  
跡を消す宋代の書  
南田石谷今壁 新也 一帖

此の法帖と云ふ駿河の女のものと今ある眼  
唐よりあり

一境終り千福の御公をまゝ、まゝと急を頼地  
頼りす家定料理を献すとの挨拶あり、所謂の  
家庭料理なるものも余の口にもよ、諸多く酒  
を飲まず嗜む所茶に在り、種々の茶を炙して  
供する中、飲る佳品あり、詠次余のく大人七一以て  
日本におふへしと、諸回々平生の志一游に在り唯此  
余よりと日本におひ、誤解百出、ぬるす兵を藉  
るこのためと云ん、余未だ日本に遊ぶの機合を得ず

と云ふ、諸り金代の釣魚甚全と稱する勝際也：  
別荘に在るもの意あり、此の釣魚甚しを平則門  
所記に云うと云、四時間計種々談話を交へて  
栗田野口と稱去、馬車一を駆り瑠璃廠を過  
く、只月甚上、新入を信し、爾も女の家半の街  
也、余此行物を購めを欲せしが、唯以寸珍本を  
得んと庶幾し、翰文高き書本を其書三四の  
書肆を訪めを探る、支那に於ても寸珍本甚  
稀也其の有るもの皆多く、科考の方より  
僅うに古書本外二種を採り、此等古書と  
歴訪や中村六郎、土村井等、今更す級書を  
又ちと漁りてあり、一店に入ら扇子葉書を







瑞香をまじり其他菓を祝す、十時宴を徹し帰  
彼の途次菓の方と三亭あり、余らし八日及禮  
亭今日主人とさうり十時名の支那校友并  
荒干の日本人を招待する件しを協議し明日  
の禮儀等を定めて旅館に歸つる。度方云し  
く浴を薦めて其に宿に託す。

八日

北京

時、京津の新聞記者中野江漢来揚、右を案内  
し、務々日本公使館支那教育館を訪問して  
明日出発し、滞在中止し挨拶を為す、帰途瑞  
瑞殿を訪れ、二三の物を購ひ、旅館にこころ来

り中野と合つて與らる。午後野江漢のを伴ふて  
四庫全書と祝人といふ旅館を去り、此の四庫全  
書は七と奉天に在るもの、表世凱外四又  
書あり、金に代へんとて果せん。今ハ為しと宮内  
保和殿に在り、人の見ると許さざらん、余ハ特  
許を得て一覽する事とらん、え来北京より  
此四庫全書の外、他二部あり、圖書館に在る  
もの、元々、前の法の人等一覽し、余ハ他の祝  
意して見ず、こゝ余ハ特に允許を請ひ、一因  
り、又在天津の一函、前日奉天に於て支那  
大官の特に齎し来んとす、一覽し、是も僅ら  
し一函とす、と恒島田の感あり、可成り全部



揮架の状を一見せんことを欲せし、これ允許を請ひ  
他の一回也、北日保和殿、余のたゞん特に開き  
へつて見よん幾百の古架をせし、七度ろきしを  
殿を塞きおろすも、駭目の感あり、二三函を取り  
出して見よ、皆る教冊を一定の榊製の函に納  
めありて各書に文淵閣印并に乾隆御説之  
寶の印を捺す、表紙に絹を以て先をむす、蛟  
龍也、表紙の色は四款各異し、紅、緑、黄、  
赤、子ハ赤、集ハ子ハ白也、余ハ久しく四庫  
全書も揮架の状を見んを欲す、而して今  
日宿志を酬ひ得ざるを老老が辞し去り、宮城  
内の圍城に到る、こゝを總統府の在る所と

し、俗に中海と稱する者此の在る、唯此は民間  
政府の在る所とすを以て北海ハ外人、元を  
許せし中中海兼に南海の在る所ハ入るを  
許せん、余の入るを得ざるを要路に在る投  
友の斡旋に因り也、圍城の名の在るをアール  
と對し、高層の建築あり、故のて中華  
民をとりこむる此の地也、(憲法)人等此を  
くまひ、地帯あり、重慶の政務皆此の地  
りあり、南海と副總統府の在る所あり、同し  
く萬機の在る深き、内に入らば金教魚玉竦の  
二門あり、玉竦橋の東瓊華島の南に承光殿  
あり、此の宮殿に連振する一字、萬世雨林の



白草八現に内閣顧問より、刺を通して會見す  
此八十四、無人とする年輩より、日本語を縦横に  
玩す、日本中央大寺の出身に、安永内を初め、  
承光殿を視る、殿中の庭園に古柏白松あり、  
風歌掬ふし、堂の前、青玉の大水盤あり、  
龍の彫刻あり、真に、鴛鴦の大月並、  
承光殿に金元頂、龍宮と傳ふ、遠築古雅を  
究み、殿内は白玉の觀音坐像を置く、身の  
丈、七八尺、加衣、裳を、寶玉を、鏤め、金銀五  
彩を塗る、面貌、浮ける、如く、艶麗人を、  
了、草々、龍降、龍姫の顔、形と、と傳ふと  
或、黙えん、えん、又、支那、稀有の、大、月、並、と、

或、圓の國、難に、標、奪を、免えん、と、幸と、謂ふ  
し、此、觀音と、水盤、八、人、其の、在る、を、後、れ、と、目  
撃者、其、詳し、と、云ふ、一、夜、終る、某の、客室  
に、復し、茶を、喫し、と、一時、問ひ、と、く、政、治を、談す  
余の、漫、想、に、政、治を、談す、と、云ふ、初め、と、云ふ  
某、虚、心、と、余と、交、酬し、南北の、事、政、黨の、事  
等、に、涉り、終る、某、大隈、総、理、時、代、の、廿一、ヶ、条  
と、難、す、余、之、れ、を、わ、る、と、云ふ、所、あり、某、田、舎、  
と、共、に、辭し、云り、馬、車を、驅り、三、菱、洋、行、に、至る  
今、夕、此の、橋、上を、藉り、余、主、催の、會を、開、く、と、  
す、也、定、刻、賓、客、廿、數、名、到る、内、十六、七、名、と、前  
夜、公、卓を、共、し、と、云ふ、支、那、校、友、と、云ふ、十二、八、一、卓



の二卓を置き支那料理を頒らし日本校書十  
名とて幹旋せしむ無禮講前夜と異るは  
酒酣して陸宗輿に代り劉崇傑の演説あり  
余も六一師の乾杯の辭を陳へ且つ明後北京出  
発の先おを為す衆皆酣臥十時過ぎ去る余と  
坂谷ゆん素のを岩田に拉せんと長き事下轉飲  
一時詠波にうろく最早一昇降等にしし事  
母援す時刻を過ぎ歩珊珊三階に上り臥す  
九日 北京  
朝来の氣漲々然と終つて支那全土をの  
てること六く馬梁皆枯んとし到る處互互

をり、本のり及るは北京を辭し去んし  
朝来行本を油あり一汗の別宮にあり橋井外四  
人先り清南に向ふ岩田一節をこ使すまう墨  
を貯るゝ十時素田野に來る、四つ見残りの南  
海を雲のせんとすあまほせ馬車を起り旅  
館を出つ、先つ新善門に入る、岩田つるん  
とも山平新後の門より北内り官局をくろ大  
統領府國務院にきてさう、國務院先き手校  
及る在在事しとるその内部を一説す、こん又我  
等、對する特別の措置也、門内に太液池あり  
り之れを南海とす、池中一島を望む島、橋  
崗あり瀛基とす、先緒帝の西太后、遊洲と



ルしと北のふとまふ、鹿在章一と一名の妻とを案  
内：階さん乗車と供給せんと池を<sup>④</sup>肉圃と  
終る瀛堂とある。北塔：架すまふ石塔あり、往  
年先湯帝を出陣の時西大石余と塔を  
断つ、今七假りの板を渡して僅くは通れ、其  
の出陣の一室<sup>⑤</sup>入り見ると規模大なる  
せんとも流るに三派のまある油分の如きも  
凡そこの、帝者の塔と地内うまうと感せんと  
どう、見りて既年と顔しは巨をを又の  
各回公使接見の二室とまふ、遜光殿：ハ先瑞  
帝の御座あり、素世凱の帝をんとするや、この  
宮城内ありしとまふ、但し其長をこの人う

園勢を取るとまふ、先とんありて入り見ると得  
たりし、唯比黎元洪副總統の塔りし、まふ一  
見を得たり、香辰堂と稱し、素世凱の庭  
園は五杉の瓦を以て作り、二基の花壇  
あり牡丹あり多く植えありと見たり、此の宮殿  
の庭園はと大なる太湖石を置き、水を引  
き、なるをせり、と無字欄を設け、五石ハ蓮の  
石橋を架し、流石：風味あり、終る素世凱の  
死：先此の遺言状を重きなる石室：あり、  
この石の小石花壇も遺言状をつらむ、  
此特々建美せり、とまふ、遺言状を金玉置  
納めたりと傳ふんと今を之れありし、終る







婿を運送(海)等あり、衆とては前回之より  
常態とホニシニ投り、今夕此地ニ校友會あり、余  
ハ一浴の後服社を改め之行く、會場ハ八倉亭  
去任之日の再公論社樓上にて、船津送飲  
事也特ニ来りあり、例のことく酒向一場の  
談説を為す、校友の會する者廿五名、席上恭  
山行ニ甘協派あり、衆皆十三のち出でんの後  
小之りこも遊覽り日子送くんと云い行を危  
甚、深更旅館ニ帰り臥す、此の天津停車場  
税関更行李を検閲す、

十日

滿南

今朝通ニ泰山曲阜行を断念ありり日子送くと

この故より滿南ニ先んかの橋井等ニ送電余  
等の同行不能と告ぐ、幸田野ニ其他各所  
の私人と接るべきをせむ、レヤツ、サボン下汚  
穢より新に二具購入、水戸駒を意外校  
友交り来訪、十一時三十分七八の校友ニ送と  
ル天津を去らし滿南ニ向ふ、校友四五名停車  
場に見送るとあり、同室ニ日本人あり、漱尾菜大  
とよふせしヨノヲ補佐者ニサウツ、崎六の休む  
花刺ニともひきを得る、此人と相手ニ種々談  
ふ、二時滄沙を去る、六時四十分德州とて  
德州ハ直隸山東の境界なり、此を(る)る地  
際限より平なり、數時乃一山をよ見す



談書を坐睡と食ふ。七時十分馬城をこき  
とんしつと黄河の鐵橋と流る。流石に雄大の  
河也。此鐵橋も獨逸の經管に傳へ、軌道の  
枕木も皆鐵橋を以て沈線アパシヤ樹を  
植ゆ。獨逸の意思くく、此の鋼鐵の枕木  
を換ゆ。時くく樹生長して伐つて枕  
木と為すと得んとくくくく深謀とくく  
考へて流る。流南に少くも漸やく二三の山  
を見る。八時十分流南に到着す。中西正樹校  
友小谷退三先生始檢察中の出印を多きけ  
始り。局ホニル(日本名)に投ず。校友に託て  
泰山行を回る。別居時日、飽地とくく

く荷

ふふ愈々漸々一行の松井寺。此の宿に  
宿して今朝泰山に向ひりと云ふ。路後一  
杯を傾く。連りの西洋料理。攻めん味  
噌を思ふ。乃ち焼味噌。他の味噌料理  
を注文して舌を後す。此も根磨の肴  
飯。根磨洋行とおきある。ハ一夫すべし  
浴室に鶏卵を多く置き。酢を流す。の  
用。供す。鶏卵の肴。多きこと。あつてし。十  
一時寝く。就く

十一日

濟南

小雨朝小谷退三先生始り。局ホニル(日本名)を頼る。先



つ録るを録る幼の録るを在に付録る生  
此捨次中(積反)に令り、更なる中西正樹を  
滴ちり積地に記して付の大明湖に到る  
此湖を古来若のりとのりし詩人の賞する所  
のり方々と昔堂に秋の面を塞き僅る一  
のりぬを道するのみ湖畔に画船あり、御  
乘ふ此の画船を幅廣く刻念に長と短と  
く、屋ありと船中に早子と豆を椅子を飾り  
茶も杯盤あり、船頭席も庭を敷き  
枕を置くと乗向合のりとも也行くこと二三  
下より一島に上り得、島上橋あり、歴  
下よりとまの思のれ此の湖のちる所歴山あり

よて附に歴山あり、此の亭の名のちる所以う  
又張公祠の一室あり、昔此の地を治めたる  
官人の祠をさう、入ると思ふ、別に政をさす  
ものあり、唯此板本を懸なく、鄭板橋二程  
七輝の、瓶一肉一七着岸、爰に支那料理  
の一品あり、客を待つ、即ち入ると平巻を  
啣大す、亭の英徳をさる、似る食の作也、食  
後湖畔の回音館を訪の、館の廊下の  
壁に木の北極法華寺碑、石鼓顔氏の古  
を刻し、石を箱入す、又一壁に蔡氏園中  
のりもる、漢畫像石十片を箱入す、  
こん其の或部合の日本に齋らし、希大あり



る残部也。武凌金氏の壁像と賦似し其心  
を味あう。會其板本を贈ふ。別々境内碑  
をと稱する一字あり。多くの古碑を  
又一二の古佛像を花より、皆を漢朝六朝  
唐のこのうし賦んまじ、羅正鈞と云ふ人  
の遺骸を海のものに送らるるを以て見れば  
此人母北地の在官の時、二四五きたるもの  
の如し。方庫に古板木数枚を包す。六経  
の板木（と知れぬ）何時代の板なるや。問ふ人と  
し。知れぬ者なりしと。遺骸送る。一晩終り  
千佛山に登り攀手んと。竹車を繋ぎ、市外を云  
日十数町よりと。車用あり。乃ち乗

ふ。ふを我邦の山花と云ふ。ふきよもの也。但此法  
構同し。いふ。大要板屋を方角に木を組  
細を（北木組）腰を卸す所とし、いふ。棒を装  
し、棒と細を結び、平を扇輿夫之れを扇は  
うく、而して乗者の足を置く所。鎖を以て吊  
りし。板あり、いふ。其の大略を、乗心地日本の  
龍。比すん。大いなりし。往々日除を装置す  
ものもあうところ。昇か、こと十七八町にして山下  
にあり。更なる。階を登り山つゝ入る。四周崖壁  
佛像を刻す。皆彩色を施し。色甚し。  
見るに。是なる。千佛と云ふ。其の張也。此山  
ハ即歴山とて寺。興國寺に。雍正十一年年







北京を占領してしるし初る日本義人かと味ふ  
ことを得たり車中大政の原田汽船分社  
茨川畑竹馬沼南紅海報社長岡伊太  
郎と誼す度方をもええ早く寝台を  
入る今夜睡眠中(今更)急ぐん居る  
一尾ニ葛ふいつし南京轟く救急せん  
雨後ある河困しや

十二日

青嶋

朝来小雨八時三十分青嶋に着き肥田中長三  
郎并に其母ハ林波中へ速急要(校互)鬼頭  
玉池富田要等出迎へ来る速急ありおほ

おほいぬ人也吾輩は投宿小憩の後戦談  
を執人と欲し先づ軍司令部に列り軍司  
令由比大将(克衛)兵謀長向井兵庫ま  
舎りて挨拶をす且つ戦談の案内  
を請ふ又民政長官秋山雅之助を訪ふ余  
此人と舊交あり談笑少時二兵士佐細中郎  
の案内にて自動車にて同乗戦談を話  
ふ要塞地域内道路砲の如く樹木鬱蒼然  
たる公園と一般獨逸の住居の周到なる  
数多先づ丘の上より海を對し砲臺  
掩蔽砲二あり鋼鉄を以つて山形に砲を掩  
蔽し其裏より遠く望めば一枿を掩ひ



其下、砲を回轉するの器械あり、視摸雄大也  
砲の掩蔽部、二三砲座あり、砲座あり、之を  
を測るに占領後、測り、砲を射し、破  
壞を測り、之を、僅、之を斯く破を  
測るのみと云くり、蓋し我海軍ハ之の傷害  
を加ふる能はざらん也、終に工此砲其至ん  
上る、此砲も今も朝日山と云ふ、あり、海軍  
の要する、こゝに流石に我海軍の力を  
大なる手取りと云う、岳なり、山上の立つて、  
マール砲台も、トケ砲台と云ふ、我陸軍  
が、萬難を冒し、地を襲き、敵の塹壕、  
通りたる地形を見る、敵ハ平野に塹壕

を穿つ之のを防衛線と云う、平地を  
敵を引きつけ、山上に砲台し、其の塹  
壕を以つて防ぎ、之を見、我軍の  
地下に、壕を掘り、之を、敵軍の  
想の、但し、僅、之を、計り、終  
に、之を得、之を、破く、  
要害の、之を、北、要害、之を、日本、  
備へ、之を、支那を、威嚇、  
を、目的、之を、之を、之を、  
山を下り、自動車をおり、要害地帯を、  
之を、屠殺場、之を、之を、次、忠魂碑、  
之を、神社を、神、之を、屠殺場、  
之を、之を、



當を継承しつゝそのもて軍司全才我ら民  
政事の任をさす所也入りて一晩するも牛を  
殺す所あり皮を脱し臍腑を冷く所あり  
冷花庫あり、没傷甚大にして且つ油の  
余等の入りし時、多数の支那人裸躰  
して皮を剥き臍腑を脱しつゝ牛の牛  
を上る吊るし、懸地中をさし、臍氣  
昇亦を蔽ひ殺氣漲る、脚下鮮血縦横  
久しく留まる能うさ、冷花室七大観模  
のちのらん特に購買者の野鹿に便する  
為の、没けつる者あり、皆鐵柵を以つて區  
畫す、此地の牛肉殊に味佳し、肉地の

東洋記

神戸牛と云ふも多し、ちよる屠殺牛と云  
ふ、坊の入口に、庭園あり、一碑と樹慰靈  
碑と云ふ、一年某期牛の霊を祀ると云  
ふ、一説に、終る自動車と疾馳し、轆轤を  
町とさく、此地と依加町の交り又點を於  
て互自動車と二人乗り横こゝるとする  
あり、余等の自動車の直行し、まると  
見し回轉ちんとし、終り、互自動車  
顛覆し、車中の者人全上と云ふ、余等  
人共介へる者不省の狀態にあり、余等  
之んと見し大いなる驚き、車中より、  
細田少佐、其他日乗のもの、出り、介抱し



三日月  
と  
おん

故を委とる漸やく難しむしめ車に  
載せしめ家と共送送す、これら餘不商産  
の供由人として二人支那人として東  
の少佐を軍四軍の送送す、午時肥田  
と根えん鬼頭玉の坊谷と共に木末の家  
に月半の屋敷を多々、こゝも海濱に  
面し風光可なり、此家の一端も海中  
石と築かれ礎と有り上に廻廊形に十数  
の室を構ひし所あり、各室の礎をどう  
石脚をアーチ形に築かれ、一種の爪  
持に就て一境す、一方に通路あり、各  
室の前を軒家のこゝも、戸々を

異し、電燈の柱も、日暮るまで  
回廊の柱も、戸をとり入る、冬は靴ぬき  
あり、室の柱も、冬は煉化を以て、  
す、このおん、聲甲、隣り、又一種内地  
に、見る、構え、浴後、校書、を  
キ一杯を、大の、感、食、  
自動車と、起る、九、と、九  
水、端山の、一、箱、と  
えん、おん、地、道、と、  
九、七、と、柳、と  
の、一、許、十六、也、余、初  
の、を、を、を、を、



減み、自動車の軍務中、河く、二時百七  
往後し得ししと云ふ由つて往親と決し、其こ  
者も、いんとしてたれと道路破のめく、道の  
西側、アカシヤ、杉、松、楓、栂、落をりし、  
先、いんを内を往くの致あり、李村ら二十  
餘、達し四十餘、合、いんとして、す、と得、  
いんとして山上、近自動車、も、り、例、の、輿、乗  
り、頂上、柳村、甚、に、到、る、四、周、の、山、勢、亦、雄、偉、  
古、く、一、筋、地、も、唯、此、た、た、の、花、あ、ん、と、も、  
を、測、く、之、れ、と、者、成、と、り、す、耳、此、地、り、  
此、駐、在、未、嘗、獨、進、大、官、が、割、業、と、言、ふ、  
所、う、之、所、在、建、築、と、い、ふ、唯、此、其、の、多、く

東海

が破壊せん、あ、いんとして日本軍、此、山、の、北、の、後、よ  
り、敵、を、死、せ、し、む、を、め、つ、て、敵、軍、自、ら、  
破壊、し、た、と、云、ふ、同、行、の、肥、前、錦、川、  
三、印、一、時、身、り、曲、り、瀬、流、又、流、寺、峰、  
擁、隔、塵、蒙、天、然、結、星、誰、傳、得、耶、馬、  
溪、山、向、中、河、と、山、勢、雄、偉、の、規模、  
耶、馬、流、の、比、に、あ、り、也、直、ち、入、帰、終、  
く、往、後、二、時、間、果、し、ん、運、轉、午、の、言、  
し、神、速、也、と、云、ふ、今、夜、三、方、を、  
を、考、へ、い、ん、軍、日、政、長、官、  
同、く、討、つ、敵、人、を、皆、掃、す、と、  
今、敵、人、を、討、つ、の、を、余、等、臨、  
府、の、使、官、上



同一橋の橋を設けんことを以てし、先づ軍政長官の招き候し立時行く、長官由比大將の官邸、ワルデックの軍の舊邸也、(石屋) 家屋にして建築に一種の風味あり、屋瓦皆瓦ろくろり余甚は之れを羨す、今夕も余の余今頃谷鬼頭中村康一の尊のふり秋山ちぢ向井冬謀長二三武官甚は此の邸に銀打資等約十七八名也、主人大喧を吐け出身を余を同甲也、卓上の珍器と皆ワルデックの遺し、(ま) 一杯一皿と華七轉物、(ま) のまのま、主人曰くワルデックは再罪を期し殊更らするその物を其の終るべきこととす

このめしと、余敵將の兵、偶に我大心と共に杯を奉ぐその愉快を言ふ、今夕の招きを謝す、(ま) 後、主人の言葉、二三の言葉を、(ま) 室の構造、油皮の接掛、皆丸まらず、流石に(ま) 猫の長を、(ま) 室に無数の(ま) 皇武を、(ま) 石井を、(ま) 果と撲つ、(ま) 又敵將の遺棄、(ま) 此の邸の由、(ま) 石井を、(ま) 又海中に、(ま) 一島を、(ま) 塔あり、(ま) 一島亦、(ま) 改を、(ま) 室後他、(ま) 二令の、(ま) 先け、(ま) 別を、(ま) 他、(ま) 二令の、(ま) 今、(ま) 日本、(ま) 料、(ま) 記、(ま) 底、(ま) 条、(ま) 記



とて到りし頃既に八時を過り、密偵あり  
余一余等を待つと處に就けん、金を城  
谷代より二令書に臨み、轉達其の二  
處に於てせよ一城の境況を試む、所  
所人等より出處ありと十数名、校及人等の  
出處あり二十数名ありし、何れも因事ある  
を以てし、余等のめり、集あらしむる、厚  
意ありし、十一時辭して、詭計こころ、大  
連の橋田流より、しりし、十者、養山曲、岸に  
行き、とる、橋中、中、古、田、那、須、の、田、人、帰、還、  
可し、詭計、あり、深、く、こころ、詭、計、す、る、能、く、  
が、い

十三日

乗船

時、早記、終、え、こ、き、十、数、名、と、現、各、所、に、置、し、  
今、の、帰、程、こ、う、し、こ、と、を、報、え、速、に、要、自、動、車、  
を、具、し、て、来、り、同、乘、軍、政、長、官、謀、士、氏、政、長、  
友、等、の、邸、に、刺、を、あ、し、り、去、り、し、肥、田、の、家、を、  
こ、き、終、に、遠、處、の、支、隊、に、大、星、が、句、こ、入、り、  
粉、製、粉、を、見、る、一、日、銃、印、を、破、毀、す、る、數、二、  
十、若、數、一、月、六、万、若、數、と、い、ふ、支、隊、の、少、  
の、多、く、破、毀、に、使、役、す、る、印、を、箱、に、法、  
め、ら、る、所、を、見、る、と、若、數、五、十、斤、を、入、り、  
其、價、を、見、と、い、ふ、こ、ん、り、ま、り、食、料、に、供、す、  
こ、の、う、ち、ア、ン、ビ、エ、ー、メン、の、出、處、あり、る、もの、を



物及びの杖と云々由、百五十斤と云、價は  
五十斤と云、此等需用あり、内地にあり、  
米田共の大きき需用あり、と云、別、流  
体の、この七出す、由、と云、の標、を、一、  
有、此、今、地、を、お、を、十、七、の、  
の、住、宅、と、所、也、去、つ、と、一、二、高、店、に、  
那、等、果、物、の、砂、糖、漬、醬、油、甘、茅、と、  
市、街、と、店、廻、し、と、飲、後、動、具、と、  
街、并、に、建、築、物、と、  
此、が、店、と、  
と、し、終、に、埠、頭、に、  
元、る、此、の、塩、は、太、陽、の、熱、を、以、て、  
作、ん、降、雨、と、云、  
那、積、と、  
大、改、高、船、の、基、  
船、脚、お、  
こ、入、り、  
と、四、十、四、日、  
が、二、月、  
と、送、る、ん、  
二、三、日、  
と、見、え、  
に、眠、る、こ、

作、ん、降、雨、と、云、  
那、積、と、  
大、改、高、船、の、基、  
船、脚、お、  
こ、入、り、  
と、四、十、四、日、  
が、二、月、  
と、送、る、ん、  
二、三、日、  
と、見、え、  
に、眠、る、こ、  
約、三、時、間、  
前、室、の、  
栗、山







此の方面は、俄に霧を起し、之れを破くこと  
のため大連湾に就て進み、或は砲を投して  
停船するにせむと云ふ事を知るのよしと  
信するも船は十時を過ぎ、門司に達し  
得る。こと最早疑いのなきに、既にして十二時  
迄、霧が解く時地を海に借るゝと云ふ  
こと、事畢の衆は古もあらず、余も船を  
入り、俄に霧が解き、三時四分迄見え  
たる七時迄の霧を破く。目撃に在り  
朝鮮半島の目撃は眼鼻に入り、而して  
海沿の基布すゝと木浦沿岸の群島あり、  
此の間の霧も我々の漸く内のかく古の在るを

外唯此を以て霧を破く。の毎行むつ踏らうと  
船長は通例梅加島を目標とし、進行す  
るも、北の霧を破く。目撃に在り、七  
時迄の霧を破く。目標に在り、迂回  
す。こと四十哩と既にして、霧を破く。一  
つと龍のひきまう。眼前の花島、倭島、  
て見、お、船は、二時、三時、に  
投して、停止す。干時、止る。二十分也。今夜船  
客、餘興を伴ふ。ん、ん、ん、の、  
余、荒干、醜出、し、の、  
すゝと待ら、睡眠を、  
の中里、勝船中、詩あり、左、



大山庚申六月十有日、由古所還、在空轉  
海、霧起不能前、船下錨於木浦、無聊  
甚矣、因賦此遣詞

昂帆去東扶桑天、渺渺積水望之茫然、他  
時難測乾坤變、人間風雲心曠望、雲霧  
欲太靈、山黯淡、海若思思欲噬、風捲  
冷雨激浪急、一夜避陰木浦邊、舟師盡  
心曠濟術、數百旅客安眠、箇中亦有  
孤旅之意、三根度來一乘船  
中里曰宗の傍より岐峯と強す詩中佛  
波を用ゆる所以也、此日聞て乗つて坪谷旅中  
の會計と整理し、金と差引勘定をとりし

乃り六月、木浦の金より、坪谷に二万八千八百拾  
仙坪谷と終ると、差引残金、日本貨物船と  
換り、坪谷より五十四圓八十四匁八分、坪谷以外に、坪谷に  
十一匁、坪谷に金と合計する九十九圓九十九  
錢也、坪谷余のたえ、坪谷の勘定、坪谷と  
夫、坪谷に七匁引残金、全部受納了

十日

船中

五時起床、船室を出て、見よん、坪谷四洲  
少雨あり、船未だ動さず、六時、坪谷錨を  
抜き、坪谷中、坪谷行と始む、坪谷一行、坪谷利  
す、坪谷ビスミットを服用す、坪谷長事務長



ニ托自華視絹素を具して余等一行并に  
木村平右衛門に書画の令乞を請ふ一行中  
栗山洋画家の需に成しし画を乞ふ中  
里木村も又南畫を乞ふ事あり、皆ま画を  
乞ふ、余藝字を作り、皆各亦其能向を  
得、午後浪漸やぐ高き船体動揺す  
食後為すこと無く寝台に入、三時眠  
覚めし又利あり存心、ロスニツトを用ひ、  
海上を望むれば海脈の波上と躍るを乞  
ふ、船に過るもの回る海脈の波上と去没す  
る時、海の浪も高き也と、前年リ、寝  
の役常、煙丸の沈没したるを拾ふも今月  
より、さうさむと記す、かのあり、一船の人心甚し、  
かゝるもの、余も船に揺るんと、激浪に  
合ふものも、當つて船を、感をも、その  
崎河酒を思ふとも、下利、教次り、以、免、終、  
疾、し、七、早、く、眠、る、

十一日

門司別府

雨、五時起床、下痢又一番、ロスニツト効を奏  
せり、六時半漸やぐ六連崎を見、七時甲  
板上に挨拶、負、ま、う、一回を挨拶、挨拶と  
いふ、力、實、の、點、呼、也、傷、め、し、もの、回、る、門、司、別、  
府、寺、席、度、漸、や、ぐ、か、り、し、甚、延、の、徴、あり







り漸やくしあつて閑て乗じ晝中の在金を換  
す尚たる園あり此の四つ目と第一の以て大  
連のり所中人等とて傷り多きけりそのもの  
こ迄を傷り多きけの無用をうしと悔む

十七

別府

昨、下痢未収まゝに、粥を啜り酒と肉を食し  
攝養をとつとあり一行自動車をおり大分を  
おのりえ出づ余ひととて清閑を会ひり日記を  
追録し午後一時一行の帰らうとありを待て急  
車を共りり、今後車乗電も一回無事の  
返電利る、又又の協分も乗勝も二十三日大

隈邸に参入合をてあゝしくし件を電報し未  
午後又日記を考きつてけ漸やく出がけ  
三十一日ら考きりる、大改の紙を報り  
暫く海をり住支川に遊神は大改り海  
道不毛を報り、再在醫術の才也

十八

乗船

雨下痢稍り収まら、朝未日記を追録し七  
時を移す、午後二時紅丸に投し神居  
赴く、法し、切符をもとて、一等船をこ  
ある、し、こゝろ一行二等客に入、二等  
室に於て、力整て客の留る所と一般雑遊







互ひに照合他日誌を作るの控をとり時を物  
す、晩飯の時刻あり、余を坪谷一等船客と  
共々食事を興する、し、猿田と後ること多時  
九時伊豫の島渡に着す、こゝに機橋の  
設備よく浦の汚内ない、まじを撈ちる  
漁船を及ぶ、九時半に便道を感じ、厠へ行  
く、便道きくし、腹痛を感じ、甚し、厠  
を存すること約三十分、冷汗顔と泣く、  
蓋し胃に腐座を起し、とる、厠を出  
て、俯し猿田に余を、猿田翰旋、サニリーナ  
寝具を置き、余にエロクティンを供す、之れ  
を服し、漸やく快也

十日の 神戸 京都

兩朝五時高松に着、一等船客より上陸す  
るものあり、余を坪谷一等船客と稱す  
を得たり、猿田筆硯と古画帳を携へ、来り  
余等の揮立毫を飾り、乃ち一行皆余の  
室に來り、縦横揮灑する、而して午後一  
時神戸に着、乗客ジヤンソウ子福えんとき  
の時奏樂、ある船の時と同じ、静かんに  
は早稲田の校歌を奏する也、又一快とす  
し、上陸直に後着旅館に入る、先が川の内東  
急行の汽車時刻と寝台の有無を以てす



別府と見がすゝま先う寝る券を購ふこと  
を電報でして此迄彼に依頼して互き也  
迄彼の夫に今夜九時の汽車に乗る  
は二等の寝台と票も無しと、余由て一行  
と別れ今夜京都に一泊を決し、京都の旅  
館へ電話を道し二時五十分一行と別  
れ先け獨り去る、五時京都着、於家へ投  
が、東京から電入京一日後、ことを報し  
且つ此の旅行の寝甚、夫Pと婚ひ入る、今秋  
酒を度し、粥をすし、閑暇攝養をいつと  
あ、

二十日

京都

朝来日誌の追録をす、十時半漸やく  
偲み、婦をむとゆ、印扶二顆を購ふ、菟  
毛北七の也、此のあ、肉を竹芭搦を  
ゆひ、圓方を漁る、印語二行、歌仙、色紙  
三十五枚を得、浦崎迄、行く、谷村よ  
り電話あり、余を某刻、重店に招え、こと  
を申来る、余、疾の如く、歸す、食後、谷村  
未訪、谷村、此年米、圓にお、ふ、雨、年、合  
ち、谷村、米、圓、し、得、来、り、寸、珍、本、二  
種、を、贈、り、一、英、佛、之、者、一、海、の、ク、シ、ラ  
パ、ト、ウ、之、者、一、珠、と、い、ふ、外、に、銀、物、の、匙



と銘も、開法時と稱す、谷村云く、山頂が  
元一なる一古刹あり、こゝに足利時代の一茶  
室ありと攝道凡そ今も佳蹟也と云は  
れど、君と此一遊克と余譲す、谷村曰く、余  
本願寺訪問の約あり、こゝを一時買むら  
りの後、再興訪問付克と云ふ、余又獨  
り、口説を巡録す、谷村再興の既、思  
をさし、感動事、日乗鐘をふる、西山  
の麓、松尾村、松尾神社の附也、一古刹  
あり、西の方寺と云ふ、元則、谷村の云々、  
古刹より、此寺、夢窓國の、中興を、  
も茶室も、夢窓の、成ると、寺門を、

は、先、村、天と、巖、古、草、路と、塞、古、刹、氣、分、換  
浸す、米、入、先、以、ち、庭、こと、を、あり、木、樹、木、樹  
々、白、畫、ち、晴、し、石、も、土、も、満、地、皆、苔、池、あり、云  
比、庭、あり、し、池、を、鏡、と、立、後、あり、榊、森、を、穿、て  
上、り、こゝ、一、宇、の、屋、あり、こゝ、を、以、ち、以、り、埋、没  
せる、有、名、の、茶、室、あり、し、山、年、佳、蹟、也、送、物、と  
稱、せ、る、ん、舊、形、に、改、造、せる、もの、也、夢、窓、に、由  
建、て、ん、と、後、亦、の、尾、終、池、を、加、け、り、と、傳、ひ、の  
今、圓、ら、全、部、改、築、二、三、の、古、材、を、用、ひ、り、の、み、地、の  
茶、室、を、丁、形、に、必、ん、茶、室、の、入、ら、べ、う、と、又、式  
の、板、敷、あり、三、方、鏡、あり、欄、を、以、て、夫、天、井、を、壁  
を、塗、り、も、と、も、一、宮、形、の、模、倣、あり、し、と、云、ふ、茶







こゝも出家の境あり丘陵の上にて一室を築き  
入ると思ふに中央に聖徳太子の像をまつるを  
し北地もと聖徳太子の別業ありしと云ふの  
因縁あるに因り側よりヤチとて一像を置きて  
寸燐を燃して祀るに夢遊國ののこる像を  
らん神未法けるが如し拜し終るを寺に復  
し中によつ住職を為す茶室と云ひ年表け  
んと谷添入深き水、獨力寺院の修理をん  
め近年漸く回復しけりと云ふ、一服の抹茶  
を出し饗らるる余湯を元々嚙下暫く茶を  
快と云ふの二三の花物を出し茶を夢遊國  
の自畫像ありむるを祀るに聖徳太子の古

間あり此寺に元七郎もの也此の西の方寺  
と云ひ一こと古阿婆と云ふに徴し得てし木庵  
の持一物あり此寺に言ふに木庵も其の  
ことありと云ふ人多し又ゆはる所のおるあり山を  
畫し和歌を詠する阿もさる人けりけり  
うすちゆん遠山見えとくれをささる一き又  
此の地をそのの地と云ふ時其を捨するに六時を  
こゝろのあまき、ぬ白と辭し自新車を祀る  
後月橋を造り山を移るに元七郎  
こゝくり、八時十分の汽車に投し四京の金  
を執り、おがすまゝ先んち谷村く、支那を  
すまゝ果物を祀る。



二十一

今朝汽車中登り、至三郎の朝解とて物く  
り、まゝの金、身、中、白く、直、次、女、あ、と、前、り  
来つと、車、あ、り、あ、う、と、ハ、時、車、京、着、必、希、望  
三、石、塚、三、郎、等、停、車、所、に、あ、り、車、物、書、す、  
田、中、唯、一、中、取、物、り、所、信、陰、ら、と、大、連、つ、と、信、受、の  
四、石、田、三、郎、印、交、付、也、久、江、年、一、海、を、ハ、大、り、年、  
廿、六、日、今、此、の、信、原、こ、の、き、ま、り、し、と、ま、り、江、野、  
濱、夫、森、湯、美、折、本、紙、有、り、又、う、石、塚、三、郎、  
岡、田、若、手、多、ゆ、石、塚、ら、と、紙、由、編、を、贈、ら、る、  
旅行中、一、州、事、の、書、状、を、換、す、梅、山、資、之、  
是、川、良、平、あ、る、忠、義、の、折、書、と、い、ふ、高、田

息、曾、藤、結、婦、の、る、い、と、ま、り、車、田、中、を、  
船、津、原、一、郎、中、に、ま、り、内、ら、と、ま、り、京、城、を、  
差、出、し、三、郎、朝、解、物、(神、仙、館) 列、在、大、連、  
ら、と、郵、送、の、印、刷、物、刊、達、不、在、中、に、家、  
物、を、郵、送、し、終、り、日、誌、を、追、録、す、児、女、  
三、八、五、十、田、若、手、ら、三、十、田、家、用、ら、と、内、  
子、に、交、付、す、夜、東、而、り、内、若、手、而、り、以、由、  
に、由、家、と、報、す

二十二

朝来日誌の追録、没録す、十時迄待事あり  
光を付のせぬ出二三の書状とゆひ、川月、飯  
し、端、出、ア、ん、ハ、ム、を、贈、り、得、て、う、く、う、銀、念、を、あ



と教習する、高橋義彦を以て久米博士と稱する  
古の事任碑文の好を奇せり、徳川侯も  
廿五日招待のる如く、又日誌を定録し夕  
刻に出席が以て廿三日の日誌漸やく成  
る約百枚を達す、腸胃未だ回復しあらず

二十三日

陰に上弘を捉き、例の注財を以て、森田三  
才功、徳川中特に厄を以て、授及野人  
十七名に取敢り、終るを以て、謝意を表す、  
午後大隈帥に参り、文の場分才十五回奉  
託書と申す、溝口者一ノ宮鈴太郎(横濱

正金形の手後但音支天長)林久沢即(英  
國の総領事)と云ふ也、(帰朝の人)あり、(例  
の如く三時迄)互に語談のあり、午後大隈  
侯最後二語を伴、(聞する)論評あり、  
未合する九千名、六時閉会、晩方雨あり、  
其の由侍士を以て、祝言の電報あり、疾  
氣未全快、(五)と云ふ、(廿四)の延診を以  
て、

二十四日

此山由侍臣程村宗八様、各集會、(未)決十一  
時、(し)り、(侍)即、(所)存、(社)に、(参)り、(社)務を、(見)る、(後)り







付来決、少好望三々、花のや、七夜と多けり  
方面に老を漸状におく、くく、花を花す、南  
の銀の國考市と花の七若干の圖書を湯見  
くく、銀北の目五、三時、永樂、作  
部、花、口、中、別、今、花、の、定、的、花、名、七  
つ、く、花、中、一、割、二、分、別、三、分、科、是、割、五  
分、と、決、す、後、有、花、花、の、件、又、決、す、本、期  
當、其、重、く、七、の、向、る、其、十、日、此、く、花  
く、今、夜、重、く、一、日、例、く、く、く、天、福、重、く、  
於、七、の、重、く、を、つ、く、加、花、重、く、花、花、和  
花、重、く、味、花、を、花、く、新、年、花、花、  
リ

二十七

西、花、り、六、の、花、介、入、く、四、の、花、花、内  
く、花、す、四、十、六、の、三、十、花、村、口、花、代、花  
く、花、上、花、花、花、の、花、花、を、花、し、七、花、  
花、内、く、花、く、新、年、花、花、花、と、花、  
を、花、く、廣、井、一、花、江、花、一、花、花、花、  
廿、九、の、又、花、出、花、花、く、花、花、花、花、と、花  
と、を、花、花、花、花、花、花、花、花、花、花、  
花、花、花、花、花、花、花、花、花、花、花、  
の、花、花、を、花、く、花、く、花、花、花、花、  
花、く、花、山、花、の、花、花、花、花、花、花、  
く、花、花、花、花、花、花、花、花、花、花、







三二の者迄とゆふて圓方を得り、  
印刷會社に能く申すに、余の分二万五圓  
あり分三十一圓五割也。藤田君より申す  
あり、八月四日中里の法に、  
おとす。

三十日

頃、坂口五郎君、東京法、  
西條全洋行、代筆の内、  
是五十四未満也。米五圓、  
きり、其木、桑、  
前、  
三、

京都山田、  
解散後の、  
行、

七月

一日

京都山田、  
古池、  
見、



ロアノの(名) 汲み水を好山 價五十五圓也  
ちりも大工修繕のあり来る、至郵局  
尾もしやツ、トウー一等の洗濯等  
又付と交り、ゆ電後午睡を食る

二日

明、竹村良久に書状をよむ、切上弘花  
身坊注射を交り、米田淳田場士寸珍  
高寺四冊贈り、森脇田村東、協合の中元  
漸花の件を交り、彦井一山田浩元、東坊  
古池来三、と海田電報、一柏文、此造  
交印、章平、寸と、個と、躰、此の、章平、寸

二日佛の外の(名) 蓋書にて文晁一泊を  
解す、かの竹村秀、と書状をサ、文のち  
院も、能中、三十一日、飲あり、北、此、行、物、  
金利、年、四十、年、祝、文、あり、上、命、物、書、  
新、に、柱、を、あ、あ、の、れ、い、事、を、冊、書、原、平、よ  
り、ま、書、を、名、刺、二、百、枚、出、来、午、睡、を、度、( )  
て、旅、り、中、の、見、ゆ、を、保、し、時、を、福、  
江、部、後、夫、の、法、ブ、リ、キ、ヤ、も、う、家、根、の、兩  
柏、政、候、を、要、す、る、個、所、を、捨、し、て、考、す、  
今、う、坪、谷、を、長、中、り、す、法、







と好むと為のそをりて改し午宛の  
ゆわも、ほ谷と謝状印刷費分控額を  
リヤある。午後素願すあり。近刊、ハリーニシ  
のデミクラーレームのまに收帳問題後兼  
との百と記すことと云ふす。午膳を度  
して印を懸記す。在天副都統三多(六橋)  
と自方一枚洗減型亦衛兵利夫を延  
て取り来る。文云指嶽降粘誕生忠良  
三多と前も在天に記す。今又其の石花の  
書画を示さん人なり也

二六〇

時、瓜、好め道遠の海に及た(アスニ、ラ  
イキ、イツト)出故、有肥を多く文の場  
合、中元謝儀として七十内森脚お  
共、在末各浮田崎士としてワレントン  
の園を起すもの。閑、兼して道遠の  
と後、午後文の場、有る。中元、中元、  
ニ中元の賞典を授けし、終つてを心、の者  
を功、珠、珠、珠、珠、珠、珠、珠、珠、  
江部、島、島、島、島、島、島、島、島、  
の立、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、  
由、由、由、由、由、由、由、由、  
の、の、の、の、の、の、の、の、























を贈り来る。其の御札をよめり。南葵文集  
の尾の紙に遺印と稱す。此（余の  
寸冊に捺せんことを承めしむるに  
別達す。収める所印敷三十歌。其の  
架中の跡と為す。美大とす。或も

十七日

明別府邸跡。遺少井。夏油屋能八車。大  
隈家執事。如女。在北条邸。多内  
東者。大寺。桑三。森。助。美。村。有。枝。友  
玉。原。権。と。文。の。協。合。し。傳。入。り。身。を  
人と稱す。試む。服部耕石。形。跡。を。印。證。

摸版を撰く。夏。示。方。坂。の。五。峯。寺。初  
め。り。く。主。由。り。に。村。有。湯。北。条。を。攝。し  
来ん。る。白。檀。扇。子。二。柄。を。贈。る。福。井。清。五  
印。の。考。就。を。よ。め。り。諸。家。主。人。死。亡。告。別。式  
代。人。を。考。る。如。角。田。井。冷。の。句。碑。と。述。渡  
身。至。五。月。寄。附。を。是。日。寄。り。服。部。耕。石  
に。文。付。す。午。後。午。睡。を。成。し。雜。記  
を。著。す。

十八日

明。早。朝。か。存。番。心。年。を。帝。國。道。に。記。す  
半。期。遊。至。七。十。五。四。路。を。朝。日。館。録



の事申上り、漫説す、十一時信てか出神由二二  
ニの能方を辨心、多嘉の経書に叙し、經を  
を廻り、二時ゆき、又雜經の書を把り  
批別、信方女子大子の出跡り、子母功二女  
久の縁語に付云く、一七去る

十九日

信、聞たり、丹兵原をもち、一斗者、朝事又  
經、經の事申上り、漫説す、並木見、菊屋、事  
菊屋、骨董代十五田拂、由、天、此、此、文  
内、浴衣、心二反、色、う、こ、り、る、え、丹、兵、原、事  
自、若、志、の、茶、を、飲、む、思、代、英、一、斗、功、閑、太

部、一、者、と、り、り、村、山、巻、一、斗、り、其  
若、家、り、旅、り、し、を、取、り、今、津、八、一、一、者  
と、一、者、と、り、り、と、り、り、と、り、り、今、津、八、一、一、者  
事、り、棋、仙、制、を、金、剛、杵、墨、七、を、柄、を、取、り、使  
く、不、大、敢、説、り、り、者、物、め、お、老、る、後  
又、一、者、と、り、り、り、女、事、り、因、行、の、吉、田、巻、事  
と、事、間、事、り、別、後、の、子、を、報、に、来、り

二十日

土用入

所、今、閑、事、麻、事、と、事、者、此、事、を、功、の、久、縁  
任、の、任、り、り、協、説、す、相、手、を、矢、吹、者、三、法、事  
士、事、り、男、事、り、貴、族、説、説、り、也、年、歳、三、十、八、才



有親院に候し、子世六人ありて、妻不妊  
の事ありと雖おとまり、有ニ妹せふ大子出  
身する関係ありと先ニ御め久を賞かし  
めとし、有ニらしむる賞をいしと出向り  
う子を以し申込み申す、思ふとお給ふ  
上大作を成ししと決す、大隈侯を幼め  
毎月一面侯の御儀を聴えんことを需め  
候り、秋流を由、差あり本月ホセ  
火曜の午後一時申一面と申し、決す  
侯の御儀を御記し之の文の御儀の  
乾紙に掲げ申す候の御儀の  
材料と申すことと申す、信常と

四代共二の事を御儀し十時切も、種  
村六八、早湯、ブリキや、身より、身委、四り、雨  
桶取、了、午後、敵、因、殺、何、も、出、未  
す、骨、甚、重、と、救、心、記、し、時、を、終、了、昂、印、知、人  
兼、本、井、上、こ、巫、世、改、え、若、村、原、持、一、と  
之、人、久、を、せ、し、と、先、方、の、履、歴、を、を  
送り、申す、今、御、儀、一、ら、し、申、す、夜、来、小  
雨

二十一。

町、松、尾、竹、吉、田、亀、壽、と、又、方、を、與、ふ、四、代、共  
一、三、考、状、を、申、す、村、山、亀、壽、に、謝、状、を



為り、山田代々来陽美村古林抄書本  
寸法、抄書本をよき、若干の圓書を懸心不  
用者、務を交付、十時より、山田印刷局に  
こり、重役、今と、一時、物、七、三、三、三、  
寸、寸、午、睡、一、番、訪、石、南、華、淡、を、淡、五、五、  
刻、散、業、銀、元、抄、表、酒、倉、し、し、之、三、関、大、  
し、し、才、才、者

二十二

昨、捧、六、七、一、身、上、し、件、有、才、身、法、廿、六、大  
茶、家、食、出、空、り、う、ろ、く、久、松、信、し、し、り、に  
古、枕、を、元、こ、力、持、た、る、頃、に、五、峯、山

況、来、陽、美、村、の、政、と、午、時、と、共、り、す、  
秋、に、し、し、紫、の、癩、を、筋、を、午、後、雷、鳴、の、聲、を  
利、の、古、池、と、し、山、田、の、入、り、冊、を、海、の、真、珠  
桂、抄、の、し、し、若、き、物、見、え、お、し、者、物、利、の、雜  
帳、を、あ、し、し、時、を、稿、す、久、松、信、の、件  
新、井、上、源、と、し、し、抄、本、と、め、ら、る、真、珠、の、中  
方、に、し、し、若、き、ア、カ、カ、カ、カ、と、見、ら、る、田、代、美、一、  
山、関、大、ら、し、し、し、才、才、者

二十三

昨、坂、本、弘、卷、本、の、注、射、を、施、す、捧、六、七  
山、田、代、々、来、陽、美、村、古、林、抄、書、本、を、二、卷



入手、お録無聊を慰む、午後驟雨利  
ふ、高橋義彦をよそ来吉、車儀越る所  
、此世まゝの形は此の世、山崎敷城を  
詠を以つて云々し、来吉、秋来江甚名を  
心の井、そお録を、おろり雨を、

二十日

雨、午浦及五十時の入浴、静求、三宅来吉の  
所、みづを来りて、曰、即録吾切也、遺書体  
有、お云々す、二三家にお介す、曰、人中、  
信若、いす、木の「世史の根本的研究」と題  
し、十時をい、え子と付、あし、数葉、神田  
をい、浅から、三四の考、店を、論、の、荒干  
の、旅、と、辨、ひ、浅、若、油、し、流、動、考  
を、つ、を、え、て、こ、く、ふ、終、り、驟、雨、を、来、

二十一日

日曜

初風、信、お、石、を、直、つ、平、に、や、を、い、年、五、廿、四  
の、自、畫、物、候、を、名、は、ハ、一、を、考、す、高、橋、義、彦  
と、五、考、を、考、す、お、録、時、と、考、す、中、山、の  
お、村、通、三、と、い、考、す、屋、の、考、怖、列、を、考、す、あ、る  
余、の、終、定、を、考、す、ち、ん、考、す、状、未、定、也、田、一、見  
廣、物、也、午、後、高、橋、義、彦、一、つ、来、吉、出、立、柳、  
子、を、い、し、来、吉、大、橋、物、を、い、し、来、吉、考、す、こ、の、親、族



油を報じ来る。

井二方

ふ製云るる風も、中山の松打湯三とて耳  
ち、十時本心の珠瑠岩を功のそ、及の記漫  
吟集、逢妻を、外二三粒を贈りて、出  
吟、御あ、とて、出、し、る、方、の、言、三、列、を  
床、を、と、て、仇、者、を、殺、す、と、代、其、一、来、功、  
吟、り、る、負、井、一、来、功、北、洲、の、被、刺、三、四、十、年  
化、念、と、し、七、三、の、組、銀、盆、を、贈、り、る、後、を、求  
と、し、来、功、三、宅、碩、夫、と、し、山、田、喜、し、ゆ、建、碑、後  
成、の、報、告、者、列、す、(前、年、建、碑、の、お、の、余、を、

長千の、り、附、を、わ、し、る、)日本、名、油、會、社、も、  
三、割、五、分、の、配、分、金、未、了、持、株、六、十、株、(以、三  
の、四、三、十、)：、あ、し、三、ろ、二、十、四、四、十、二、製、五、五、  
也、が、田、崎、と、し、齋、清、言、後、し、る、台、也、)の、り、

二十七

坊、朝、身、客、と、し、る、を、と、り、て、今、其、推、心、の、鑑  
定、論、を、撰、む、新、編、音、義、日、意、名、辭、事、也、  
四、友、名、の、海、を、印、刷、し、て、贈、り、来、り、諸、税、十、四、四  
六、十、二、美、納、り、甲、生、活、下、傳、傳、會、社、と、し、  
入、る、重、四、十、四、の、利、子、を、四、十、四、也、納、付、海、並  
木、森、賜、す、之、功、千、後、と、し、大、隈、郎、と、し、列、す、一









久須美方のまじり方物をもつ、外出中、平山  
中利助、五、松村、三、寺、物をもつ、  
源、今、閉、令

二十九日

晴、岩、梅、修、費、七十、由、中、十、美、拂、清、才、若  
う、く、寸、冊、抄、報、正、午、こ、別、う、じ、志、午、後、雪、降  
り、一、天、雨、と、停、し、ま、る、ま、る、う、く、う、く、降

り、来、り、り、蒸、し、あ、る、ま、こ、と、若、し、閑、臥  
後、う、け、の、ま、ま、の、鑑、定、論、を、漢、正、由、陰  
雲、空、し、く、散、り、終、こ、あ、と、ま、ま、知、り、物、外、涼、を  
覚、ふ

三十日

晴、坊、上、弘、花、集、う、注、狀、を、施、す、又、江、城  
一、松、而、中、の、石、田、代、美、一、身、幼、経、七、次、四  
岸、の、白、物、心、ま、り、才、美、話、午、後、心、と、興、り、七、外  
る、午、後、雨、す、教、兼、し、七、物、と、鑑、り、七、過、り  
興、り、雲、尾、身、法











掛曉大雨あり雷雨あり高風あり、田村堀倉用  
りてあり、又お船を始り、十一時迄方角鎮に  
物久縁宿の件あり事始あり、此今路の内  
定し、口もあり、方角をこし入し分断る、名  
多を共ししてあり、此城水谷公共四五の  
國者を高くししあり二三程購ひ入る、此所  
府老部ふ合鎮しゆてきき、出版部よりし  
新刊横山崎士古書物語の編纂を配本し  
来り、又氣を流すあり才二級初頭五冊刊  
達致す大雨雷雨あり

風和ぬき、此れとも雨を来未り云々、  
所出川田部、後高を傳へ、関大中一人  
の紙紙後社ありを付ひあり、南士登山  
隊より、舟渡の舟を絶たせ、此道、行き  
今も此道ありとて往々、中士の舟を引  
てあり、文政堀倉の津邊集を改めたり  
、舟お船の此等、杉山東陽、田新書あり  
、本集二時の百禮堀堀してあり、午後祿  
田銀生をて散果物を購ひて之、此  
間、此田本あり、さり物多し、矢吹家の  
内、舟中丸油、付元油の結果を報告







所載を以てし、七の次大騾(一) 賦  
 中書所中条農多段内梶藤三(一) 湯(一) 嘉  
 祿(一) 八(一) 先(一) 河(一) 肥(一) 田(一) 堂(一) 嶋(一) 先(一) 生(一) 三(一) 十(一) 三(一) 回(一) 忌  
 辰(一) 追(一) 悼(一) 祭(一) を(一) 催(一) する(一) 事(一) 所(一) 集(一) を(一) 徴(一) する  
 の(一) 通(一) 牒(一) 列(一) 依(一) ち(一) 未(一) 復(一) 邦(一) 々(一) 之(一) 書(一) 内(一) 々(一) 崎(一) 依(一) 三  
 印(一) 崎(一) 源(一) 米(一) 三(一) 所(一) 集(一) の(一) 書(一) 列(一) の(一) 書(一) 即(一) ち(一) 谷(一) を  
 一(一) と(一) 披(一) 考(一) せ(一) し(一) め(一) ず(一) 豆(一) 本(一) 源(一) 氏(一) 物(一) 徳(一) 年(一) 入(一) 三(一) 二(一) 八(一) 冊(一) 入(一) 候  
 八(一) 久(一) しく(一) 披(一) 考(一) せ(一) 七(一) 湯(一) 々(一) 一(一) し(一) 七(一) の(一) 也(一) 二(一) 十(一) 八(一) 冊(一) 入(一) 候  
 七(一) 回(一) 也(一) 寸(一) 冊(一) を(一) 新(一) 河(一) の(一) 山(一) 田(一) 敷(一) 城(一) と(一) 披(一) し  
 其(一) の(一) 吟(一) 詠(一) を(一) 録(一) せ(一) ん(一) こと(一) を(一) 需(一) せ(一) ず(一) 物(一) 屋(一) 築(一) 中(一) し(一) 物(一) と(一) 考(一) せ(一) ん(一) 為(一) 也(一) 在(一) 天(一) 皇(一) 乙

未(一) 出(一) 前(一) 四(一) 代(一) 珍(一) 耳(一) 珍(一) 卷(一) 寄(一) 回(一) 集(一) を  
 後(一) 山

未(一) 出(一) 山(一) 口(一) 達(一) ち(一) り(一) 山(一) 口(一) 五(一) 云(一) 義(一) 儀(一) 士(一) 三(一) 百(一) 十(一) 年  
 前(一) 十(一) の(一) 古(一) 山(一) 高(一) 地(一) 也(一) 東(一) 都(一) 下(一) 村(一) 西(一) 大(一) 中(一) 々(一) 度  
 名(一) 札(一) 免(一) 段(一) 札(一) を(一) 見(一) ん(一) 事(一) 二(一) 田(一) 村(一) 玄(一) 就(一) 河(一) の(一) 内(一) 度  
 次(一) 中(一) 々(一) 方(一) 札(一) を(一) 見(一) ん(一) 事(一) 菊(一) 尾(一) 花(一) を(一) 披(一) 考(一) せ(一) 来(一) る(一) 王  
 琴(一) 仙(一) 一(一) 幅(一) 祇(一) 方(一) 紙(一) 一(一) 幅(一) の(一) 石(一) 用(一) 骨(一) 基(一) 代  
 主(一) の(一) 由(一) 考(一) せ(一) 事(一) 真(一) 崎(一) 依(一) 城(一) 々(一) 地(一) 打(一) 出(一) 候(一) 物  
 子(一) 々(一) 三(一) 三(一) 出(一) 川(一) 耳(一) 午(一) 後(一) 々(一) 寄(一) 崎(一) 依(一) 城(一) 有  
 五(一) 十(一) 年(一) 所(一) の(一) 由(一) 一(一) 難(一) 紙(一) を(一) 考(一) せ(一) 七(一) 回(一) を(一) 考(一) せ(一) 事















降の此侯四五回也。ゆき後言原唯方濃  
侯産経秘の存殆と懸えしある。余の予ま  
松山理のしり

十七の

時、在輕井澤出陣柳子とし身者久経存  
の件、之に關し天吹家未だ法續上先妻の難  
婚手續とすし居らざることを後々并解  
し来る。而方とすし及むと共く、法續の手  
續とるべき前内約とあるを誤解を  
生ずるに由り、手續統る後嫁あり心約束  
とあるよし、そのまむを而方手と引く

方を申せし、天吹家、遠くしあ、下村  
正大らしらと述むあり。病状あり快方  
に向ひえし身未とすし八瀬、新美の中  
とし来る。十時母下谷の文行巻と功の  
と東部名家の墓石碑、松本十四巻の  
寸本一と燐ありとくる。其海城の内  
状と見るや又其傍義美彦の二書を其  
ふ。時、引つ、き屋丸の傍記とあり  
しるる。松本忠次とすし身者直と答ふ

十八の

ほ内あは是(在松山)身者、去江あ丁あ



四、於て出版せしる處是の他後「若」系に浦  
崎」處て出版せしる十部あるも、内二  
部、余く送る者、紙あり、但し浦崎を以  
て、フラインターに打ち出すのよし、せに上流用  
也、改上弘亮事、例の注射を余く、ゆ  
りて去る、内、久、竟、も、使、事、物、を  
終、又、偽、製、し、互、け、る、良、寛、者、柿、の  
字、を、偽、変、鉤、に、し、る、も、の、七、入、年、す、こ、ん  
ち、是、邊、の、味、に、應、し、良、寛、集、字、の、款  
を、心、え、ん、お、也、独、物、愛、護、局、の、技、師  
あ、ま、進、登、し、他、事、り、危、楯、を、換、し、し  
す、ま、念、味、の、一、時、由、邊、邊、と、柿、字、を

郵、久、す、ま、才、進、子、欣、二、海、兵、團、に、あ、り、出、演  
海、の、威、風、い、こ、く、も、肺、疾、と、さ、り、な、る、也、此、處、頃  
田、後、今、り、來、り、古、池、紀、平、沙、の、山、水、を、持、卷  
ち、三、つ、巻、し、聖、に、掲、げ、ら、る、り、湯、沙、出、法、中  
の、平、沼、境、海、二、橋、士、も、事、候、鈴、木、守、藤、の  
り、ま、者、の、り、出、演、物、子、も、よ、事、者、兒、三、味  
線、代、表、る、田、文、村、午、後、休、七、外、出、團  
者、と、思、ふ、光、子、の、な、る、ハ、リ、ナ、イ、ド、リ、リ、ナ、心  
花、瓶、を、購、ふ、驛、角、一、と、

十九日

皇、爪、城、内、雄、飛、の、中、の、時、差、を、甲



とある者、先河紀の電先生廿三回長  
子内省記念祭の記しある廿五十  
五日也、寄附を主ながら、撰録を  
郵送す。三枝元ちりし年、山陽諸  
一時と稱す、牧野油中、並木定二  
印、年法、坊ゆき、佛文、段行志、浦  
二部つ、列を述、驟而去来、午後寸冊  
抄録時を移す、病心、あつと、おの  
昂道、但し、十七、が、右、合、位、也、合、併、を、と、す  
と、終、始、終、の、つ、く

廿口

而、日本人所載の泰山論を、後、軒井山  
別和の著者の、海、列、に、擬、定、山、詩、節  
録、う、り、寸、冊、一、成、の、味、打、言、は、板、本、三、印  
年法、午後、併、む、と、先、子、日、は、ゆ、出、神、田、の、病  
史、の、為、國、考、を、嫌、ひ、海、神、の、初、会、居、を、湯  
ひ、録、す、と、廻、り、四、谷、三、海、居、と、稱、す、あ、ら、し、う  
へ、る、初、入、今、驟、而、去、来、き、り、よ、列、了

廿一

掛馬大面あり、坊ゆき、湯、也、あり、朝、来、大  
眼、若、生、存、録、原、稿、を、誤、り、且、つ、後、す、堤、康、次  
即、ち、身、者、萬、尾、の、底、と、あ、同、洋、装、を、と







勅のうき其のヤリを筆す、関大らんと電  
報も一子死云と報し、父の女子三人  
前之遊と今又唯一の男子をたふ、肺毒の  
信染に候、此をたし、本邸耳取、玉原雄  
監と申す、多病を交へ、午後印を弄し  
七時を福す、家倉の印七八万顆、今、私  
撰印譜に収めて、その五十万顆を揀出し  
昔熱を日し、七印入、持し、二冊の印譜  
を必、四冊し、紅雲山、印贖と云、又  
とか物屋、策中、かく、才、跡、漸く、満所  
昔、中、し、努力、偶、然、の、ま、さ、さ、也、つ、て、

廿四日

小雨、今、津、八、一、二、三、日、者、朝、可、も、又、印、を、懸  
理す、東、儀、感、雨、北、陸、也、其、の、本、功、物、を、宛、と  
古、池、事、あり、ある、ま、江、邊、印、三、顆、並、  
吳、江、の、十、畫、画、冊、を、示、す、其、四、十、五、日、也、畫、冊  
小、物、座、の、架、尺、と、さ、ふ、畫、六、甚、一、也、畫  
印、三、顆、也、大、解、花、六、の、刻、也、午、後、大、隈  
邸、に、抵、り、一、時、と、し、四、時、と、し、先、侯、の、談、論、を  
聴、く、(月、一、今、才、二、回)五、時、え、大、工、町、春、日、の、時  
口、又、内、を、招、飲、院、終、神、山、の、寺、に、三、言、り  
ち、の、移、を、願、ふ

廿五日



頃後上弘持成りし注射を言ふ。菊尾の巻  
心を頼みたり寸隙を若く個出来此頃也  
同千本也。板石改本也。唯此儀の件并寸  
法、石十由路の、預け入の、浅山山勢其時  
平三印も是れ也。清見の、赤脚、岡、地  
江守の、堀、念、の、子、を、交、す。此、乃、鏡、田、松  
造、物、と、號、す。池、中、金、子、高、底、と、も、是、奉  
の、件、有、ら、る、し、來、る、五、者、を、投、す

二十七

古池、露、山、の、山、形、寸、珍、帖、を、獲、え、來、る、時、入、の、  
此、頃、廿、七、日、也。前、方、未、押、也。分、り、せ、四、十、日、改、す

祇園、改、古、持、寸、珍、帖、の、巻、の、改、装、を、托、す。  
丹、美、原、平、と、も、來、者、北、堂、の、碑、刻、字  
成、り、又、建、碑、心、油、如、等、改、報、し、來、る。  
拙、者、刻、文、拓、を、勘、定、者、力、來、る。総、持、井、  
川、田、也。直、と、五、也、を、見、る、す。十一、時、と、是、  
を、付、ひ、お、出、成、向、に、圓、者、を、纏、ひ、り、し、持、丸、  
表、と、立、言、り、圓、形、を、拓、す、と、似、し、て、  
夜、蓮、吸、持、法、を、復、す。

二十七

陰、園、大、ら、く、香、典、の、日、兼、梅、状、を、見、  
る、大、隈、侯、咄、語、録、を、又、竹、場、合、と、稱、し、  
物、載、り、る、其、の、石、し、ら、き、し、を、行、す











大正九年八月迄の日記の終  
書す

此ハヶ月間、特記を要する者左の如  
一 嘗年以四の先如身前於家殺し  
余其の遺族の情を感し爲に傳  
記を編纂することを得て本  
年一月より三月にかけて材料  
採集を編纂家に努力し其の旨  
日(九月末)迄に印刷成る、余が此  
般の編纂家、従ふ改進社三四回の  
例あり、而して此の編纂家、尤も







とて初めを是を四角に奉け五月  
廿一日東京をりぬし廿四日金山に着  
京坂を天を浮て大連に入り旅順を  
訪ひ、又うまを天へ戻り、こんろを大  
谷田へ入りとみん、又うま北京へ入り  
天津、濟南を経て青島と乗船  
四月、六月廿一日物もつて北下月  
の旅行を余も興味を利を興を興  
ること甚大也

一余の寸本蒐集は千部を期し、二、  
又二年有半をこきとす、而して八月  
下院終、満所の目的を達するを

得たり、此の蒐集を多くと必致し心  
とこきとのらんが、日々の散策しと  
此の蒐集のわたり、繼續せん、他原  
に多の裨補するを、且つ一旦志  
し、なること不事と、幸も寸本余度  
するを不可なり、終に目的を達す  
る、もろ、寸本の千種蒐集あり、其  
際甚難きを感し、其々條件  
を具付する、版本の又千部を得ん  
こと、内容多し、とをえて、又か、  
既言し、廿冊、七十七冊、より又書  
畫の寸帖と稱ひ、添え、七十三冊



種々の地蔵のありしを、  
ありしを、  
ありしを、

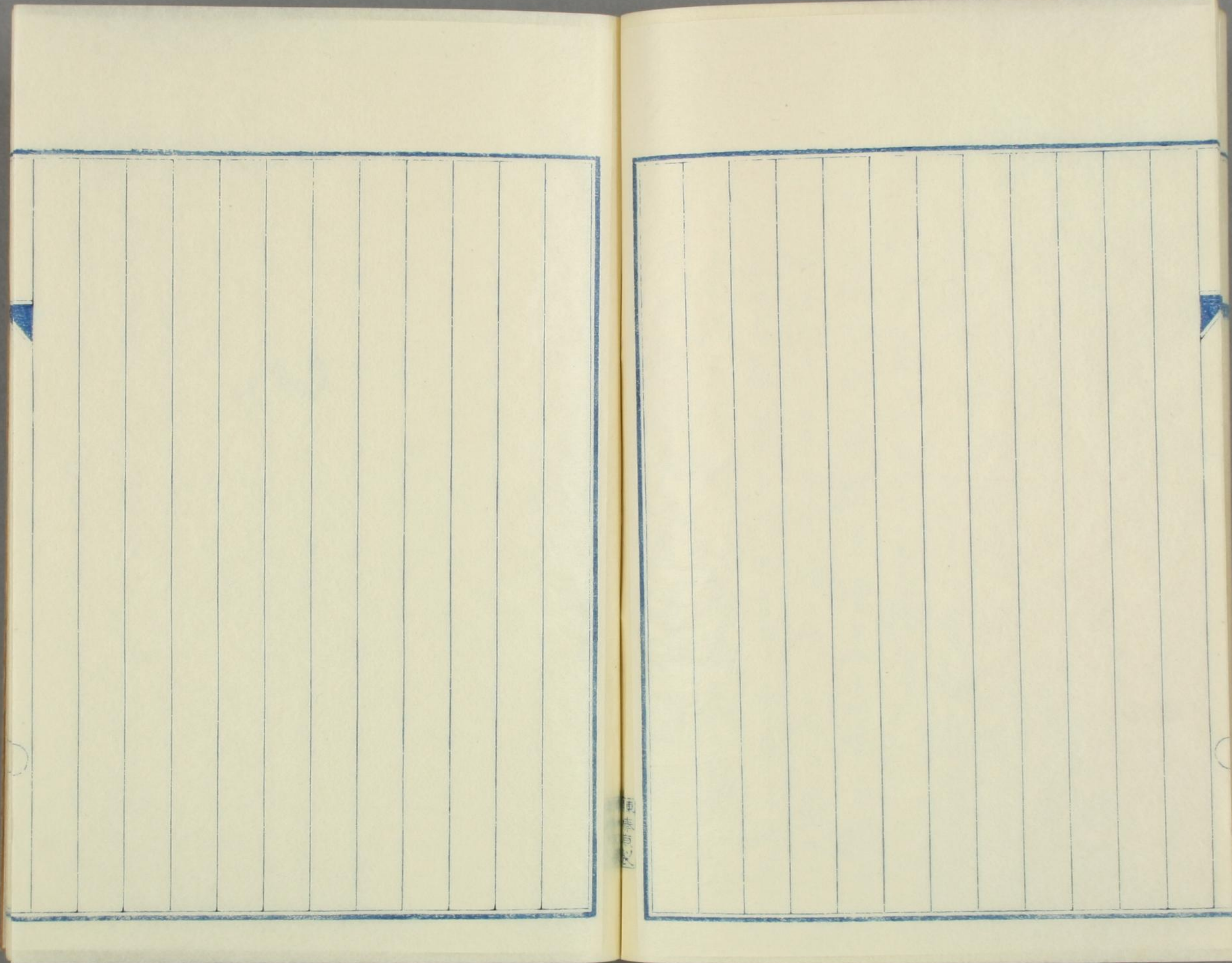
一 此年春、ワツキに江射を改上、  
うらまのけ、  
うらまのけ、  
て、  
行かざるを得ず

一 亡北屯の墓、  
時、  
朱、  
墓誌と碑、  
を本、

大正九年八月 天長

春城手記







以下  
5 丁  
白紙







